

# ニッポタイトスム

第 六 卷 新 年 號



日 東 伊 太 斯 社





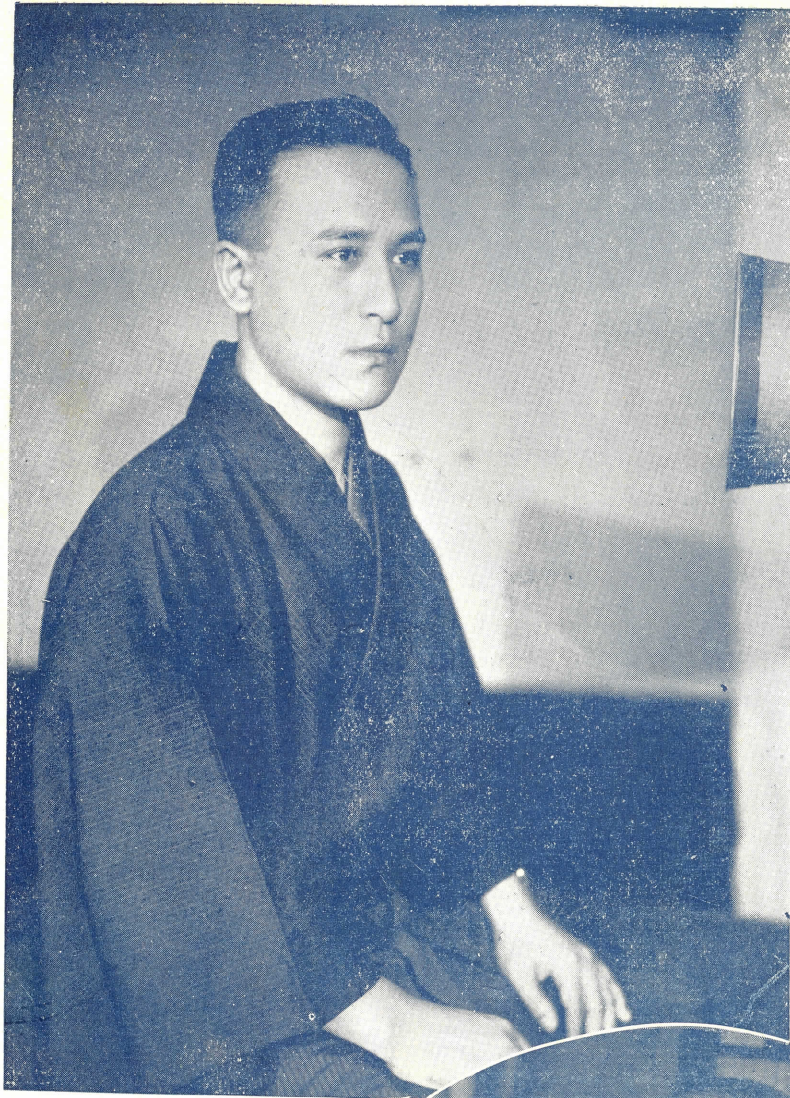
左の寫眞は舊臘日東蓄で「越後獅子」「松の  
 緑」を吹込んだ際撮影したもので前列左吉住  
 小三郎、右杵屋六四郎、後列左森下日東蓄専  
 務右杵屋六次の諸氏。



夫太壽延 元清

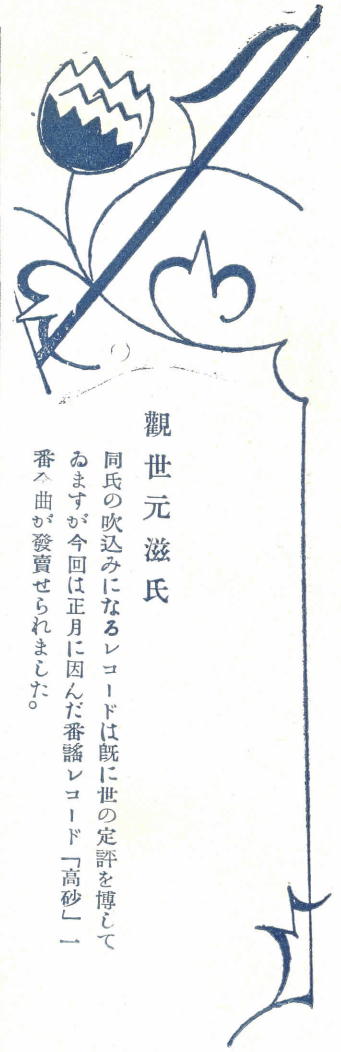
夫太壽榮 元清

郎次榮 元清



觀世元滋氏

同氏の吹込みになるレコードは既に世の定評を博してゐますが、今回は正月に因んだ番謡レコード「高砂」一番の曲が發賣せられました。



豊竹古靱太夫師

同師が鶴澤清六師の三味線でニットレコードに吹込んだ太功記十段目は今度愈々正月新譜として賣出されました。

# 屠蘇のおくび

澤田柳吉

彼の有名な元祿花見踊を作曲した二代目  
杵屋正次郎と云ふ人は、餘程の天才であつ  
た事も事實だが又一面非常な皮肉の人であ  
つたさうで、尤も作曲の上から云つてもあ  
の花見踊の中程の手の場處などは弾い  
て仕舞へば何んでもないものを皮肉なハッ  
キを使つてゐる爲に指の廻はらない人達は  
随分に泣かされると云ふ事であるが、兎に  
角此の正次郎と云ふ人は非常な皮肉屋であ  
り天才であり又相當多作家であつたらし  
い。そして元祿花見踊は明治十二年に發  
表されたのだらうだからまだ近頃の人なの  
である。此の人の奥方が喜三梅と云ふ唄ひ  
手で又非常に美聲であつたさうだ。或る時  
此の正次郎先生奥方に向つて云ふのに貴様  
も日本で一とか二とか自惚れて居る唄うた  
ひだし拙者も日本第一の作曲家なんだから  
乃公が勝手に三味線を引くから貴様も勝手  
に唄つて節付てみると云ふ事で合奏を始  
めた處が立派な名作が出来上つて仕舞つた  
と云ふ事だ。其處でそれが奥方の名前即ち  
喜三梅の梅の字を取つて「梅の榮」と名づけ  
たと云ふ話がある。又此の人の作品として  
は例の筑摩川などゝ云ふ著名なものもある  
が他の人のやうに決して苦心などはせず大  
概車の上でこしらへて仕舞ふと云ふのだけ  
ら其の樂才の豊富なのに驚かされる。

某が先生の宅で三味線を盛に弾いてゐた時  
に其の人が獨りつぶやいて「怒うも此の三  
味線の三の糸巻が甘くなつた」とみえて下つ  
つたら正次郎先生「生意氣な事をほざくな  
い」も二も三も皆んな狂つていらあ」と云  
つたさうだ。大家の悪口と云ふものは随分  
徹底してゐるのに驚かされやう。これと同  
じやうな話が私達の方の畑にもある。  
過般故人になられたケーベル博士此先生  
の事は餘り世間では一般的には知られてゐ  
ないが哲人で音樂學校で今洋樂界の一流と  
ころは大なり小なり此の先生の薰陶を受け  
たもので過般異國で客死した久野女史など  
も可成先生には面倒をかけたものだ。此の  
ケーベル先生が或るグア井オリンの先生の  
演奏會出演の下稽古を聴いて居つた。又そ  
の節他にも三四の教授達も集まつてゐて各  
々勝手な批評を下して「怒うもあすこの處  
がしつくりこないが指が悪いのかしらう？其  
れ共あの人は耳が悪いのかしら？私の考へ  
ではあの人は弓の働かせかたに缺陷がある  
のだからと思はれる」と云ふ風にひそく  
話をしてゐると先生曰く「御前途は何んて  
事を云つてゐるんだい！あの人は耳も指も  
手も決して悪い事はありやしないよ。たゞ  
（あたまが）悪いのだけさ！つまり馬鹿と云  
ふ事が悪いだけさ」と云つてケロリンとし

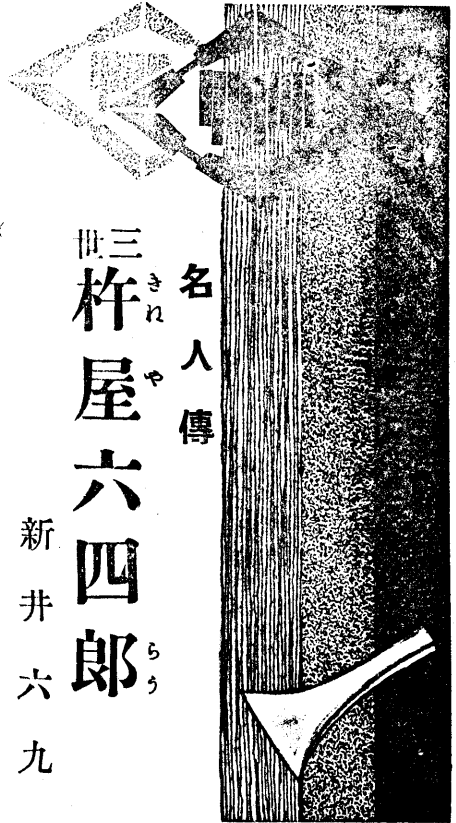
てゐるものだからこれには居並ぶ悪口にか  
けては聞き馴れて漫性の區域を通り越して  
しかも兎役になつてゐる筈の音樂學校の先  
生達もさすがに呆然と驚かされて仕舞つた  
と云ふ事だ。これなんか口の悪い方ぢや  
正次郎先生に負けてはゐない、最も異國の  
作者達とくると斯んな話はざらにある。大  
分に古い事ではあるが今こそ樂界のスト  
ノザードの評論界のヒームだのと云はれて  
ゐる我國唯一の有名な伊庭孝先生も青年時  
代同志會に研究してゐた時分に無神論を高  
唱しだしたものだから學校側でも棄て、置  
けず放校處分をして仕舞つたがその結果先  
生今更教師にもなれずさりまで立ちん坊に  
もなれず男妾にや瘦せ過ぎてゐるし、仕方が  
ないから役者にでもなつてみやうと云ふの  
だつたのだらう兎に角其の當時の新人達謂  
ゆる類は友をよぶの譬へ通り穩順ならざる  
御連中を大分集めて何とかと云ふ演劇團を  
これ上げて何んでもかまわなから新らし  
い脚本を上演しやうと云ふ事になりシヨウ  
の作チヨロソット兵隊を伊庭が譯し自ら其  
れに出演して木戸錢のいる芝居を帶劇だつ  
たが有樂座だつたかたで公開した。其れが比  
較的評判が善かつたものだから各地到處  
で打つて満座なく儲けてゐると突然英國に  
居たシヨウの處から確か時事新報だと思つ  
たが其處へ宛て、手紙をよこした。其の文  
面に「親愛なる日本國、貴國に「イパツコ」  
と云ふ奴がゐる我輩の名作チヨロソット  
ルシヤを譯して盛んに上演してゐるさう  
だ、我輩に斷りもなく無斷上演はまことに  
怪しからん、けれ共仕方がない親愛なる時  
事新報今度若し彼の尊敬すべき（イパツコ）  
と云ふ奴に會つたら宜しく云つて置いてく  
れ」と云ふのであつた大家や天才には又一  
面に斯う云ふ茶氣慢々たる處もある。



## 目次 (第六卷 第一號)

懸賞答案募集の問題  
と規定は本誌第十四  
頁にあります

- 屠蘇のおくび：澤田柳吉……一
- 杵屋六四郎……(名人傳)……二
- 新井六九……二
- 清元北州：清元延壽太夫……三
- 長唄越後獅子、松の縁……三
- 吉住小三郎……三
- 小三郎箔屋町藝談……四
- 淨瑠璃太功記十段目……四
- 豊竹古軼太夫……六
- 浪花節櫻川五郎藏……六
- 吉田虎右衛門……六
- 映畫説明 國定忠次……八
- 伍東宏郎……八
- 浪花節一琵琶……一〇
- お伽歌劇風のクリスマス……一〇
- レコード文句集……二〇
- 聽言記新聞……二〇
- 落花集……二〇



名人傳

三杵屋六四郎

新井六九

六四郎は、三味線をとつて女師匠の前へ座つてゐます。

「失禮ながらあなたの強くなるのは違つてゐますよ。第一に撥先きの當るところが違つてゐますな。木と皮との接合點から先づ約二分程皮の中心へ寄つたところ——御らんなきい此邊へ、こうぼつんと入れるんです。そうすると、確りした音が出るもので木と皮との接合點だと、音色がどうも賤しくなるんですよ。撥を持つた方の手は肩とも腕とも手首とも、何處へともなく全體に力が同じやうに入らなくちやいけません。三味線をひいて特に手首がこるの腕が痛むのといふのは、力がそこへ片寄る證據で、こんな事ちやいけません。斜に構へた棹の高さは昔は肩衣を着けたさきと一二の糸巻とが平行する位が最も良いとしたのですから先づ四十五度よりは少し下り目でせうな。それから棹と胴と平行させるよりは、少し肩の方へ引き加減が形はよいのです。で、いまの道行きの、とんとんくと攻めて行くところはおわかりですね？」

「さつき、あなたの弾いてのをきいたらどうも一の糸が少しゆるんでゐました。何んといつても一番大切なのは調子です

からことに大切な一の糸はしつかりとめておななくちやいけませんね。それにつけたこの糸はさうしても延びるものですか。若し會なごをやる時は三分ばかり前から、ちやんと充分に張つておくのです。ういつて、六四郎は、遂かに膝を立てました。

「あ！さうも大層失禮をいたしました。本當に、こりやさうも——氣遣ひと思召しておゆるささい」

「わしは、東京の杵屋六四郎です」と、仕方なく名乗つたが、それがあの女のためによかつたか悪かつたかは別としてとにかく女師匠が、眞違つて弾いてゐる自分の作曲の「道行」を手をとつて教へ、なほしてやつた事に一種のうれしさと満足を感じました。女師匠も喜んであやうと、いふ事よりも、自分の苦心した仕事か、こうして一人にでも正確に残される事が何よりだつたのです。

「いけなくちやあ——女だな」

「いけなくちやあ——女だな」

「あ！さうも大層失禮をいたしました。本當に、こりやさうも——氣遣ひと思召しておゆるささい」

「わしは、東京の杵屋六四郎です」と、仕方なく名乗つたが、それがあの女のためによかつたか悪かつたかは別としてとにかく女師匠が、眞違つて弾いてゐる自分の作曲の「道行」を手をとつて教へ、なほしてやつた事に一種のうれしさと満足を感じました。女師匠も喜んであやうと、いふ事よりも、自分の苦心した仕事か、こうして一人にでも正確に残される事が何よりだつたのです。

「いけなくちやあ——女だな」

「いけなくちやあ——女だな」

煙るやうな春雨を蛇の目を受けて、濱町の大師匠六四郎はたゞ一人、京の街を歩いてゐました。少しさつきに灯が入つたばつかり。いつ來ても何んもなく物なつかしい木屋町の夜を、今宵はしみみ味ひ得るやうな心地がしました。

これからどこに誰を訪ねやうといふのではありません。東京の忙しさから脱れて、いは心の保養に來た身ゆつたりゆつたりと足を運ぶ耳へ、遠くから、はるかな遠くから「ぼつん」と一つ、三味線の音が入りました。六四郎は、思はず立ち止まつて、改めてき、耳をたてました。

「いけなくちやあ——女だな」

「いけなくちやあ——女だな」

の音の聞える方へ近づきました。如何にも、さややかな女師匠の家。表には長明吉住X女の札が下がつてゐます。六四郎はその家の横の枝垂れ柳の下に、黙つて立つてゐました。家の中では、師匠が頼りにお弟子の居ない間の稽古らしく、繰返して繰返し、

「虎少將道行」を弾いてゐます。師匠は相當な腕ですが、もとより六四郎にきかせては子供の業とも思はれませう。しかもこの「道行」は、六四郎が、落屋町と一所に苦心して作曲したもののなのです。しげらく、すると六四郎は、格子戸へ手をかけると、

「御免なさいよ」といつて、その家へ入りました。

「いけなくちやあ——女だな」

歩るき乍ら六四郎は、いまあの師匠へ教へた際の當て方について、も一度自分を振り返つてみて、月の冴えたあの夜の事を思ひ出しました。

X X X

秋の木のことです。

月が鏡のやうに清く澄んでゐるのを、一ぱいに座敷の畳へ汲ひ込んで、際掛け窓近く座はつた六四郎は、灯を消して、頼りに三味線を弾いてゐました。弾いてゐるといふよりは、ぼつん／＼と一撥づゝ、當てゐるといふ方が良いでせう。

「どうして俺の撥はこう動くんだらう。一撥毎に音色が違ふ。こんなことぢやいけぬ。流石は十世六左衛門。撥皮のところが一厘一厘も狂はなかつたさうだ、このために一番強く、もう皮に毛筋程の穴があくので番毎に皮を張り替へたつていふが偉いもんだ、俺は、一撥づゝにほんの毛筋程でも當りが違ふ、音色が違ふ、——これでも聴き手は誤覚化せるが、俺自身の心は誤覚化せぬえ」  
そしてまたしばらくぼつん／＼とやつてゐましたが、段々目には一ぱいの涙が浮んで「駄目だー」  
と、捨てるやうに呟くと、秘蔵の三味線を其場へ、さつと、投出して、ぐつたりと倒れるやうに寝ころびました。

四

妻女が唐紙を開けて、この様子を見て吃驚しました。

「まあ、あかりもつけずにどうなさいました」  
「俺は今仕事をしてゐるんだ、来ないでくれないうてくれ」  
「でも、そんなところへ寝轉んでゐてお風邪でもひいてはれ」  
「良いから、来ないでくれ来ないでくれ。」  
「然様ですか——」  
ところへ、父の苦しみとは全く別な世界に住む長男茂雄が笛の稽古をはじめたのが、流れて来ました、溢れるやうな力の籠もつた藝は、何者の胸にも染み込むやうな音色です、茂雄は二代目住田由之助、一世住田又兵衛に師事して、やがてはその四世たるべき天才です。由之助の笛は藝界驚嘆の的となつてゐるのです。

「あー伴の笛が聞こえる」  
六四郎は、むつくり起き上りました。そして、遠かは端座して、身動きもせず聴き惚れてゐました。  
「偉い力だー」  
こみ上げて来る嬉しさと、自分を返返るある淋しさとで、六四郎の胸は一ぱいになりました。  
「俺も明治三十三年に三代目六四郎を繼いだ頃には、伴のやうにたッ力一ぱいで、藝に對する淋しさも不満さもなかつた、たゞ華やかに弾きまくつて満足してゐたもんだつた。それがこの頃はさうして、さう俺の思ふ通りにならないのか。世間

では俺の事を、名人だの大師匠だのといふが、俺はさうしても俺自身の腕に満足は出来ないんだ」  
「何を云つてゐらつしやるんですの。今頃になつてあなた」  
妻女は笑つてゐました。  
「お前にはわからないよ。俺はこの年になつて本當に三味線といふものがわかつて来たんだ」  
「どなたがお客かしら？」  
さう云つて立つて行く後に、六四郎はまだ黙つて伴の笛の音をきいてゐました。

こうした思ひ出と、女師匠へ傳へた一曲との、近頃味つた事のない心地とで、六四郎はゆつたりゆつたりと、五條の方へ出て行きました。

五

文政七年頃、四世杵屋六三郎の門弟に六四郎といふのがあり、藝もしつかりしてゐた上に「三國妖狐」などを作曲して、仲々評判でありました。師匠の六三郎はもちろん十世六左衛門にも愛されてゐたので、大名分府などのお座敷での脇三味線は、この人に定まつたやうなものでした。この人の門弟四郎治といふのがいまの四代目六四郎の父親で、六四郎は本名を金太郎と云ひます。

今、吉住小三郎が、得意中の得意の出し物の一つとしてゐる「熊野」は六四郎が僅か二十二才の時の作曲で、この處女作は、六四郎をして、名人と呼ばしめるに到つた第一歩なのです。

これは熊野と宗盛の掛合になつてゐますが、初演の時には、宗盛の方は今の伊十郎（その頃伊四郎）と勝三郎（三世）で、熊野の方は小三郎と六四郎で、小三郎は六四郎より一つ年下の二十一才、八本の高い調子で響つばいものでした。一方の伊十郎は聲は堂々たるものでしたけれども、ちつとも「上げ」の利かぬ人でしたから、つまり高いのと低いのと兩極端の二人組ませて六四郎はあの「熊野」を作曲したのです。ら、その苦心は並大抵ではなかつたでせう。これによつて六四郎は、青年二十二才、すでに作曲の名家として名を成しました。  
二十十年間ばかりに六四郎が小三郎と協力して作曲した有名なものはかりでも、虎少將道行、鼓ヶ浦、大正の榮、高砂、琴の功、阿國歌舞伎、櫻咲く國、菊の宴、など數ふるにいとまない位でありませう。

六四郎の三味線の駒の高さは三分八厘から四分のものを用ひ、一の糸は十五、二の糸は十三か十四、三の糸は十三、會などで弾く時は一の糸を少し高い位に張つて置くさうです。



# 小三郎箔屋町藝談

平素私どもが、ごなたかと話を  
してゐる心持を、その儘かへすに  
原則として歌をうたへばよろしい  
のです。大體が歌といふものは、  
ある言葉とか文章とかへその内容  
をもつとも適當に現すやうな節を  
つけたものなのです。から、ごんな  
歌であつても、この心持は忘れない  
ことです。従つて不自然な作り  
聲は絶対に禁物であります。

## 新内明から

吹込者

富士松佐賀尾

長唄をうたふ人の最も氣をつけ  
ればならぬことは常に達者である  
つまり健康であるといふことです  
それには齒と胃との攝生でからだ  
を眞底から丈夫にしておかねばな  
りません。むかしの人が食物につ  
いてはいろ／＼教へて置いてくれ  
ますが、私は大きな演奏をする日  
には饒の小串を食べる事にしてあ  
ります。これが別段すぐに利き目も  
何んとなく精分がついて、力強く  
唄へるやうな氣がするものです。

◇

私共にとつて風邪は大禁物です

が、少し位の風邪をひいてすぐ喉  
がつぶれるなごいふのは稽古の

そんな場合には、決してエヘンと  
カウソとか喉に逆らつて、無理に  
切つてはいけません。その儘、大  
切に加減をして、少し靜かにうた  
つて行くと自然に痰は消えて行く  
ものです。

◇

聲の素質の悪いといふ事は決  
して差支ありません。練習をつ  
ければ、細い聲でも太い聲でも自  
由に開かせ得るやうになるもの  
です。

唄の巧い拙いは結局は唄ひ尻り

忍び疲の枕二つをそのまゝに、と  
りもなをさぬ眞夢のやぶれてうつ  
浦里、廓をのけし身すからや、宵  
の口舌のつれ髪、取りあぐる、宵  
も中田圃、寝巻ながらの、元帶。  
目人に立つを時次郎鐘は、上野が  
淺草の森をばなれて花川戸、吾妻  
橋と手をととりて、二人が影のまた  
二人、月にうつつるも追手かと、氣  
なけしたまの、ほうかむり、素足

につらき石原の、川邊すたいにお  
ぼろ浪。灯影がすかに歸り舟、唄  
を流す鳥さめも、番はなれぬ、お  
し鳥の仲になつ、きすく、と、  
別れの辛さに袖じぼる、ほんに辛  
氣な辻占や明日は無き名を立川や  
われからまれく扇ばし、此世を猿  
井大島の、森のしげみにたどり着  
く。

足りぬ證據です、日頃の練習さへ  
充分にしておけば、風邪などはび  
くともしないものです。もちろん  
風邪をひけば誰でも喉は侵される  
ものですが、みつちり練習した喉  
ですと、然程ほろを出さずにやつ  
てのけ得るものです。

◇

唄ひ出した時に、全く自分が豫  
期しないところへ、ひよつと喉が  
咽喉へ擲んで不愉快な聲が出る事  
が、往々にしてあるものです。

の扱方と息遣きにあるやうに思ひ  
ます。うたひ尻といふのは、一寸  
はじめての方には説明してもわか  
りませんが、つまり産み字の切り  
具合、聲尻りの止め方で、それは  
場所と文句によつて種々の方法も  
ありますが、一般的なものとして  
は、息を切る時に、節尻をびよい  
と跳ねるので、然うすると、節  
もはつきりするし、後も非常に  
やすくなります。たゞこれは、初  
心者がやる時、跳ねるのではなく

聲尻が上るといふような、似て非  
なる結果になりますから氣をつけ  
ればなりません。實に唄の品位が  
良くなるのも悪くなるものもこの  
唄ひ尻の扱ひ方一つにあります。  
強いところ、軽いところ、押さ  
へるところ、振切るところなど、  
文句の意味に従つて、長唄の妙味  
をみせるのは、全くこの一點の巧  
拙如何にかゝるものと思つておま  
す。

◇

私は大きな演奏の際は、その出  
し物について朝から腹の中で種々  
工夫をして見ます。そして此所は  
こう、あそこはこうと、いろ／＼  
な注文をつけて行くのですが、さ  
て現場に出てみると、三味線もあ  
り鳴物もあり、又ツレる唄もある  
から、自分勝手な注文通りには行  
きません。丁度相撲が注文をつけ  
ても相手の出やう一つで其の場  
に應じて色々變化するやうなもの  
です。私はまたその場の中のそん  
でいろいろ／＼な唄の變化が、また一  
種の妙味あるものだと思つていま

大勢で演奏をする場合には、全  
體がタテに附合ふといふ心持を忘  
れてはなりません。素人の會など  
では、殊にこの心掛けが大切で如  
何に一人が巧くても、全體が揃は  
なければ聞いてゐても、一向に詰  
まらないし、みつともないもので  
す。

◇

タテはご／＼迄位を持つ事に全  
力を注いで貰ひ、ワキは曲をやる  
のですが、若しタテが聲をつぶす

やうな事があつたら、すぐに代理  
をする位の心で、一寸でも油断が  
あつてはなりません。三枚目は邪  
覺にならぬやうに藝を演ずるとい  
ふ心掛けが第一です。そしてタテ  
に倣はなければならぬが、間拍  
子などは、二枚目に従つて行く心  
持でなければ、全體が揃ふもので  
巻軸は昔はタテと同等の力の人が  
座つたもので、相撲でいふと張出  
しの格です。こゝへ座る人は第一  
に美音家がよいやうで、こゝへは  
自然に干が通つて行く勘定になり  
ます。この巻軸が、實力のある人  
であるか無いかといふ事が、全體  
の藝の上には大變な關係のあるも  
のです。

◇

長唄は先づ姿勢でうたひます。  
平らに座はつて上體を正しくし、  
足の指は左の親指を右の親指の上  
に重ねます。女の方だとこれと反  
對に右の親指の上へ重ねるのが定  
法です。そして下腹へぐつと、力  
を入れるのですが、是は殊更に力  
を入れるのだと意識して、かゝつ  
てはいけません。自分で下腹へ力  
を入れやう／＼と思つたり、入れ  
てゐるのだといふ者をもつてゐて  
は駄目ですから、私はお弟子さん  
達へは、下つ腹へ力を入れよと特  
に注意はしません。なまじに注意  
をすれば却つて不自然なものが出  
来るからです。唄をやるのについ  
て全體の力が入るのには云ふ迄もな  
く下腹ですが、初心の中はこれが下  
腹へ入らずに胃袋の上へ入りたが  
るものです。日頃の練習に下腹へ  
力を入れるやうにしてゐれば、自  
然にそれが出来るやうになります  
そうしなければすてしめたもので





# 清元北州

三味線  
上調子

## 清元延壽太夫 清元榮壽太夫 清元榮次郎

約束堅き神無月に、誰が誠より本

一 凡そ千年の鶴は、萬歳樂とうたふたりまゝ萬代の池の龜の甲は三曲にまがりて、廊を露はさす、新玉の。

二 霞の衣えもん坂、衣紋つくらふ初買の袂ゆたかに大門の、花の江戸町京町や、春中合せの松飾り、松の位を見返りの、柳櫻の仲の町、いつしか花もちりてつとんと。

三 見世清搔の風薫る簾か、げて時鳥鳴くや鼻月のあやめ草、黒白もわかぬ里衣、いよし御見の文月の、亡き王草の燈籠に、星の痴語事私話、銀河と聞けば白々と、白帷衣の袖にそよぐ。

四 はや八朔の白無垢の、雪白妙に降りあがり馴染重ねて二度の月見に經とて見とて、合せ鏡の姿見に露うらかけの菊がされ、さくのませたる禿ぎく、いつか引込突出の

五 ちよと百ついた浅草寺、筑波の山の此面彼面、葉山茂山おしげりの繁き御影に榮へゆく、四季折々の風景は、實に仙境も斯やらん、隔

六 打や大鼓の音もすみ渡り、かくべと招かれて居ながら見する石橋の、浮世を渡る風雅もの、歌ふも舞ふも難すのも一人旅寝の草枕おらが女房を譽めるぢやないが、

飯も炊いたり水仕事、麻よるたびの樂とみえ、一人笑して来りける

二 越路のお國名物は様々あれど、田舎訛りの片言交り、しらうさになることのはを、雁の便りに届て

見渡せば、西も東も花のほか何れ賑ふ人の山、打寄る女波男波の絶間なく、逆まく水の面白や、晒す細布手にくるくると、晒す細布手にくるくると、いざや歸らん己が住家へ。

### 越後獅子

は九世杵屋六左衛門の作曲で三世中村歌右衛門が上方張りに演じたところから上方唄の越後獅子を基礎にして手を入れたものだそうである。この作曲によつて六左衛門は世界的に名を残したのです。

「越路湯」のところ少しと「布晒し」の合方だけを取つて「打つや太鼓」のところから「俺が姿」のところなど全部六左衛門が作ったのです。

「俺が姿」の踊り唄は長唄以外にも通俗的な小唄としてすいぶん唄も通俗的な小唄としてすいぶん唄

立の山鳥の尾の西の市、妹許ゆけば千鳥足、日本堤を土手馬の、千里も一里通ひ来る、浅草市の戻りには、吉原女郎衆が手鞠つく。

六 打や大鼓の音もすみ渡り、かくべと招かれて居ながら見する石橋の、浮世を渡る風雅もの、歌ふも舞ふも難すのも一人旅寝の草枕おらが女房を譽めるぢやないが、

七 飯も炊いたり水仕事、麻よるたびの樂とみえ、一人笑して来りける

八 越路のお國名物は様々あれど、田舎訛りの片言交り、しらうさになることのはを、雁の便りに届て

九 見渡せば、西も東も花のほか何れ賑ふ人の山、打寄る女波男波の絶間なく、逆まく水の面白や、晒す細布手にくるくると、晒す細布手にくるくると、いざや歸らん己が住家へ。

十 向い小山のしちく竹、えだふし揃へてきり細かに十七が、室の小口に晝寝して、花の盛を夢に見て候、……

## 長唄松の緑

獨吟  
三味線  
上調子  
ワキ

### 吉住小三郎 杵屋六四郎 杵屋六次

今年より千たび迎ふる春ごとに、なほも深めに、松の緑が禿の名ある、二葉の色に大夫の風の吹通ふる、松の位の外八文字、派手を見せた

はれまずし、第一ブチニ氏がオヘアに取入れて「お蝶夫人」を組み立てた位で本當に世界的です。大正十年にエルマン氏が日本へ来た時などこの「俺が姿」のところを、いろ／＼な人に歌はせてきいたといふ事です。

### 松の緑

「吾妻八景」や「勸進帳」など、共に四世杵屋六三郎の作曲でその天才的な創作手法は當時の藝界を驚嘆させたものだといひます。

吉住派では「松の緑」を「切り切らず」といふ唄ひ方、つまり一言

「今年より」は息を切らずに一息にうたふのですが、こしを延ばしておいて、ちよつと節だけ切つてよりと續けるのですが、気がつかずにあると「こし」と「より」とを別な息でうたつてあるやうに聞こへます。その實は一息なのです。よく注意しておき下さい。

「今年より」は息を切らずに一息にうたふのですが、こしを延ばしておいて、ちよつと節だけ切つてよりと續けるのですが、気がつかずにあると「こし」と「より」とを別な息でうたつてあるやうに聞こへます。その實は一息なのです。よく注意しておき下さい。

何たらぐザダへ、牡丹は持れど越後の獅子は、己が姿を花とみて、庭に咲いたり、咲かせたりそのおけさに異なると云はれ、寝まり寝まらず待明す、御座れ話しませうぞこん小松の蔭で、松の葉の様にこん細やかに、己が姿を花とみて庭に咲いたり咲かせたり、そのおけさに異なると云はれ、寝まり寝まらず待明す、御座れ話しませうぞこん小松の蔭で、松の葉の様にこん細やかに、彈て唄ふや獅子の曲。

向い小山のしちく竹、えだふし揃へてきり細かに十七が、室の小口に晝寝して、花の盛を夢に見て候、……



# 浄瑠璃 太功記十段目

吹込者

豊竹古靴太夫  
糸鶴澤清六

一間へ入りにけり、残る蕾の花一つ、水上げかれし風情にて思案投首しほるゝばかり、やうく涙押しとめ、  
母様に、婆様にも是今生の暇乞、此身の頼ひ叶たれば、思ひ置く事さらになし、十八年が其間御恩は海山かえがたし、討死するは武士のならひと思召し分けられて、先き立つ不幸は許してたべ、二つには初菊殿、まだ祝言の事をせぬが互の身の仕合せ、わしが事は思ひ切り他家へ縁付きして下され、討死と聞くなれば、さこそ歎かんと不便やと、孝と戀との思ひの海隔つ一間に初菊が、立聞涙まらび出で、わつと斗りに泣出せば、はつと嬌き口に手を當て、アコレ〜聲が高い初菊殿。  
扱ては襟手を、アイ残らず聞いて居りました、夫の討死に遊ばずを妻が知らいで何んとせう二世も三世も女夫ぢやと、思ふて居るに情けない、盃せぬが仕合せとは、あんまり聞こえぬ光慶様、祝言さえずすまぬ内、討死とは曲がない、

わじや何んぼでも殺しはせぬ、思ひとまつて給はれと、歎けば、アコレこなたも武士の娘ぢやないか、十次郎が討死は棄ての覺悟、婆様に泣顔見せ若し悟られたら未來永々縁切るぞや、エイ、サアとかう云内時刻が延る共體體〜へ〜、アイ〜、サ早ふ時延る程不覺の元聞譯ないとい叱られて、いとい夫が討死にの、首途の物の具付けるのが、ごう急がる、物ぞいのと、泣く泣く取出す緋緋の鏢の袖にふりかゝる、雨か涙の母親は、白木かはらけ白髪、長柄の銚子蝶花、首途を祝ふ鬘斗昆布、結ぶは親さ小手脚當、六具かたむる三々九度、此世の縁や割小さ立は、猪首鍬形の、あたりまばゆき出立は、爽なりと其骨柄。  
チ、あつぱれ武者振り勇し、功名手柄を見る様な、祝言と出陣は一緒の盃サア〜早うア〜日度い〜嫁御寮と、悦ぶ程ないや増す名残り、こんな殿御をもち乍らは別れの盃かと、悲しさかくす笑ひ顔、随分お手柄功名して、せ

めて今宵は凱陣をと、後は得云は寸喰ひしげる、胸は八千代の玉椿ちりてはかなき心根を、察しやつたる十次郎、包む涙の忍びの結、しほり棄たる吹き送り。  
衰れをこゝに吹き送る、風がもてる攻太鼓、氣を張り直しつゝ立ち上り、いづれもさらばと云ひ捨て、思ひ切たる緋の袖、行方知らずなりにけり、ノッ悲しやと泣き入る初菊、母も操も顔見合はせ、婆様、嫁女可愛やあつたら武士をむざ〜殺しにやりました、ノッ初菊、十次郎が討死の出陣とは知り乍ら、なま中留めて主殺しの憂死恥をさらさうより、健氣な討死にさせん爲、祝言によそへて盃をさしたの、暇乞やら二つには、心残りのない様と、思ひ餘つた三々九度、婆が心のせつなさを推量しやと斗りに始めて明す老母の節義、聞く初菊も母も、一度にどつと伏し轉び前後不覺に泣き叫

# 浪花節 櫻川五郎藏

吹込者 吉田虎右衛門  
糸東 天 紅

はてな、ごなたか水をば汲む様な音がする、おさんごんの早や起きでもあるまい、立つて雨戸の間から見てあれば、六十路の坂を越えたる母親の姿、見るより五郎藏堪り兼ね、もつたない添けぬ、そ只さえ夢やぶられて寝られぬ、そなたの體、無理な願がけなされて體に障りてならんぞえ、俺の様な者でも悴だと思え、年老ひたるそなたの壽命までちめ、添けない勿體ない、添けない母上様俺の力で處ていても、そなたの

ぶ、襖押しあけ何氣なふ、つかつか出る以前の旅僧、コレ〜かみ様風呂の湯湧きました、ごなたぞお這入りなされませと云ふにこなたは泣顔かくし。  
チ、それは御苦勞、さりながら年より新湯は毒、後は若い女子共、アお先きへ御出家からいか様、湯の辭事は水とやら左様ならば、御遠慮なくお先きへ参ると立上れば、三人は涙押包み、奥の佛間と湯殿口、入るや月もる片庇、爰に菊取る眞菜垣、夕顏棚のこなたより、あらはれ出たる武智光秀、必定久吉の内に居るこそ屈竟一只一討と氣は張弓、心はやたけ數垣の見取の竹をひつそぎ鐘、小田の蛙の啼く音をば、さめて敵に悟らるゝと、差足拔足親ひ寄り、聞くゆる物音心得たりと突込手練の鎗先に、ウア〜つとたまぎる女の泣聲、合點ゆかすと引出す手負、眞菜にあらて眞實の、母

のさつきが七轉八倒、ヤ、こは母人か、死なしたり、残念至極と斗りにて、さすがの武智も仰夫し只茫然たる斗りなり、聲聞きつけて馳け然る様、初菊諸共走り出で、ノッ母もか惜げないの有様は何事とすけり歎けな目を見聞らき、歎くま〜、歎くま〜、内大臣春長と云ふ主君を害せし武智が一類、斯くなり果つるは理の當然、系圖正しき我家を逆賊非道に名を穢す、不孝者とも悪人ともたとへがたなき人非人、  
不義の富貴は浮かべる雲、主君を討て功名顔、たとえ將軍になつた迪、野末の小屋の非人にも、おとりしとは知らざるか、主にそむかず親に仕え、仁義忠孝の道さへたば、もつそう飯の切米も、百萬石に…増さるぞや、已れが心只一つで、しるとは目前是を見よ、武士の命を斷つ及も多に、此のやうな引そぎ竹の猪つと鐘、主を殺した天罰の報ひは親にも此通りさ、鐘の糖先に手をかけてえぐり苦しむ氣丈の手負、  
妻は涙にむせえり…、これ見給へ光秀殿、軍の首途にくれん、もお謙申した其時に、思ひとまつて給はらば斯うした欺きはあるまいしよ〜で乗り込んだ、幡隨院身内で三百有餘人關取迎ひ、角力場差して乗り込まば、品川新宿吉原より、櫻川への大人氣、五反帳や十反帳、立てた帳が縮緬で、風に吹かれてパツパツタ〜と勇しや、入で山なす見物中、御危工御免さ會釋なし、  
大きな體を下にして人で山なす其中を、御免〜と會釋なし、通る

の主君でなく、我諫を用ひずして  
神社佛閣を破却し、惡逆日々増  
長すれば、武門のならひ天下の爲  
討取たるは我器量、

武王は殷の紂王を討つ、無道の君  
を討つは民をやすむる英傑の  
志、女童の知る事ならずさりお  
らふと光秀が一心變ぜぬ勇氣の眼  
色、取付島もなかりけり、折しも  
開ゆる陣太鼓、耳を貫く金鼓の響  
あはやくと見ゆる表口、數ヶ所の手  
疵に血は瀧津瀬、刀を杖に所るほ  
ひく立歸つたる武智が一子、庭  
先き大息つき、ア：親人々々是  
におはするやと、云ふも苦きき斷  
末寛、見るに驚く母親より娘は傍  
にはしり寄り、のういたわしや十  
次郎様、婆様と云ひお前迄この有  
様は情けない、お心遣にもつてた  
べ、やいのと取り付て介抱如  
在泣あり、

光秀わざと聲あらくげ、ヤア不覺  
なり十次郎、仔細は何と様子は如  
何に、具さに語れと呼ばれば、ハ  
ッと心を取り直し、ア：親人の指  
圖に任せ手勢すぐつて三千餘騎、  
濱手の方に陣所をかため、今や歸  
國と相待つ所に、敵はそれ共白浪  
の櫓を押切つて陸路に漕付け、追  
々都へ馳せ登る、眞柴の軍勢ござ  
んなれと聞をつつて味方の軍兵  
縱横無盡に奔立つれば、不意を打  
たれて敵は廢亡狼狽騒ぐな、追立  
て、追詰、愛をせんご、戦ふ中、  
後ろの方より大音聲眞柴筑前の守  
久吉の家臣加藤清正是にあり、逆  
賊武智が小わつばごも目に物見せ  
てくれんすと、云ふより早く太刀  
抜きかざし、四角八面に切立死  
れ降り、無念ながらも只一騎立歸

つて候と、息繼あへず物語れば、  
光秀けかりの髪逆立て、ヤア云ひ  
がひなき味方の奴輩、シテ四方天  
但馬守は、さん候、四方天は目指  
は久吉一人と詐朝よりの一騎がけ  
亂軍なれば生死の程も儘にそれと  
承はらず、親人の御身の上进心に  
か、り候故、未練にも敵を切ぬけ  
是迄落延び歸りぞや、此所に御  
座あつては、あやふしく、一時も  
早く本國へ引取給へ、サ、早く早  
くと深手を屈せず父親を氣づかふ  
孫の孝行心、聞くに老母はせき氣  
て、アレ、を聞きや嫁女、其身  
の手疵は苦にもせず極悪人の慘奴  
を大事に思ふ孫が孝心、ヤイ光秀  
子には不惑にはないか、可愛いとは  
思はぬかい、己が心只一つで、  
いと可愛いの初孫を忠と義心に  
健氣なる討死でもさす事か、逆賊  
不道に名を穢し殺すは何の因果そ  
と、せぐり苦き老の身の聲聞き  
つけて十次郎、ヤ、そんなら婆様  
には御生害、遊ばしたか、

今生のお暇乞今一度お顔が見たけ  
れど、ア、ア、もう目が見えぬ  
父上母様初菊殿、名残りおしやと  
手をとつて、妹背の別れ愛着の道  
に引かぬ、いちららさ、母は涙に  
正體なく、討死するも武士のなら  
いと云えご情けない、十八年の春  
秋を及の中に人となり、いつ樂し  
みの隙もなふ弓矢の道に目をゆだ  
れ、今朝の首途の其時には、母様  
今日の初陣に天晴功名手柄して父  
上や婆様に響らるゝのが樂みと、  
ニツと笑ふた其顔が、わたと幻に  
ぢら付て得忘れぬと口説たて、く  
きたたつれば初菊も、ほんに思え  
ば此の身程、果ない者が世に有ふ  
か、とけて逢ふ夜のきぬ、永き

願ひでても勝てませう、それとは  
氣づかず母親は、願ひ濟して、ふ  
るえ乍らに我居間の、後へ廻りて  
五郎藏も、水汲み浴びて神頼み、  
祈りまつるは成田山、不動明王の  
御利益で、ごうぞ勝たして下さい  
ませ、願ひはすめども心にかゝる  
は母者の事  
時遅れてならぬ程にぼつく、仕度  
くにかゝりませうぞえ、オウも  
行きやるかこれ悴、勝たつたえ  
を聞くのを楽しみに、待つて、く  
だんせと、ぶらりと出でたる表口  
まだ明けやらぬ朝まだき、ワ、雜  
踏の人の聲、中に加はる三四十人  
櫻川なる弟子角力が、今日で十日  
目取り組の、御師匠はんに勝たと  
らせにやならぬと、思ふ心は  
弟子一同聲を揃えて角力甚句の勇  
も名残りのい、なづけ、  
二世を結ぶの枕さへ交はす間もな  
ふ此様な、悲しい別れをする事は  
マアどうした罪か情けない私も一  
緒に殺してたべ死にたいわいなと  
はし名残り涙の暇乞、見るに目も  
くれ心消え母も老母も聲をあげ、  
わつこ斗に取り亂せば、さすが勇  
氣の光秀も親の慈悲心子故の闇、  
輪廻のきすなにしめつけられ、こ  
たへかれてはら、雨  
か涙の汐境、浪立ち騒ぐ如くなり  
又も聞くゆる人馬の如く、矢叫の  
聲喧びすく手にとる物音、あ  
ら、光秀聞くより、立上り、ア  
ノ物音は敵か味方が勝利いかにと  
庭先のすれ木の松が枝、踏しめ踏  
しめ、よち登り、眼下の村手なきつ  
と見くだし、和田の岬の弓手より  
追々續く數多の兵船、間近く立た

妾に見物か、あれ見ろあれが西角  
力の櫻川、年が若くて色が白うて  
愛嬌があつて腰びくで、角力が手  
取りで色で迷はず苦勞人、西の溜  
に櫻川、相手の黒鷲三太夫も、天  
下直參旗下一同に取り巻かれ、角  
力場として乗り込んだ、角力番數  
取り組で、  
奴の呼ぶ聲に、かたへが櫻川に  
は、こなた里鷲三太夫、聞いた見  
物一同が、一番が見物だぞ、ご  
ちらが勝ても勝つた角力は土俵下  
さす命とるには違ひはないぞ、町  
人天下の轡隨院身内と、旗本一家  
大喧嘩、一番が見物ぞと、拳擲  
んで一同が、肩で風きる兩力士、  
土儀中ばに現れた、行司木村の庄  
之助、エツチャドツコイナと取り  
組んだ納まりは一寸一息、

る魚鱗の備え千成瓢の馬じるとは  
羅ひもなき眞柴久吉、風をくらつ  
て此家を逃延び、手勢引具し光秀  
を討取る術と覺へたりと云ふより  
早くひらりと飛びおり、草履襦み  
の猿面冠者、イア一ひしぎと身繕  
ひ勢ひ込んで駆け出せば、ヤヤ武  
智光秀暫らく待て、眞柴筑前の守  
久吉對面せんと呼ば、つて、三衣  
にかはる陣羽織小手脚理も優美の  
骨柄、ゆうぜんとして立出れば、  
光秀見るより仰天し駆け戻つては  
つたと白眼、ヤ、珍らしい、眞柴久  
吉、武智十兵衛光秀が此世の印導  
渡してくれん、觀念せよと詰寄る  
光秀、  
中を隔つる老鳥の子故に手疵屈せ  
ぬ老女、ノフ久吉様、我子にかは  
る此母も、天命遁れぬ引そぎ鐘、  
作りし罪の萬分一亡ぶる事も有ふ  
かと、思ひ餘つた此最期、武智が

母は逆遊にか、つて無慘の死を遂  
げしと、末世の記録に残してたべ  
それもやつぱり悴奴が可愛いさ故  
の罪亡し、うるさの婆婆に殘らん  
より孫と一緒に死出三途、ハア私  
もお供させていただきます、さ  
らば、おさらば、未練げさぬ武士  
の花も實もある此世の別れ、今ぞ  
りなくならにけり、操の前も初菊  
もさらに詞も出ばこそ、あえ亡骸  
を押動かし、天にあがれ地に伏  
して歎く心ぞいぢらしき、それを  
餘所に眞柴久吉光秀に打向ひ、俱  
に天をいた、かぬ亡君のむら  
軍今此所で討ては義あつて勇を失  
ふ道理、諸國の武士に久吉が軍功  
を知らさん爲、時日移さず山崎  
にて、勝負の雌雄を決すべし、如  
何に、チ、流石の久吉よく云  
つたり、  
私も惟任將軍と勅許を請し身の本  
懐、一先部に立歸り京洛中の者共  
へ、地子を免すも母への追替、互  
の運は天王山洞が峠に陣所をかま  
え、只一戦にかけ崩さん、首を洗  
つて觀念せよ、ホ、何さ、ハ  
……、たとえ項羽が勇あるとも我  
又孫呉が秘術をつくとし、千變萬化  
にかけなやまし、勝鬨上ぐるはま  
たく内、と久吉が詞はゆるるが  
大盤石、忽ち廻り小栗駒の土に哀  
れを殘すとは知らじとらね敵味  
方、にみ別る、二人の勇者、二  
世をかため別れの涙、か、れと  
てしもうば玉の、其黒髪をあえな  
くも切拂ふたる尼ヶ崎、菩提の種  
と夕顔の軒にきらめく千成瓢箪、  
駒の嘶き迎ひの軍卒、見渡す沖は  
中國風り追々入来る數萬の兵船、  
威風りんりんせんたる、眞柴  
が武名假名書にうつす繪本の太功  
記を、末の世迄も残しける。

# 映畫説明 國定忠次

## 吹込者 伍東宏郎

和洋管絃樂伴奏



國定忠次は火事より怖い  
ニツコと笑へば人を斬る

天保四年の大飢饉に上洲生れの俠骨で關東一の男伊達忠次の怒髪天を突き悪代官を誅伐して枯風寒く稍を渡る秋の暮れ一味と共に赤城の山の瀧山不動に立て籠つた。

「えッ板制の淺、言譯は聞かれえ二心がれえと云ふなら八洲の捕方勤助の首を斬つて来い」

と突き放されて淺太郎は悲憤の涙で木の間に洩れる月明り村里遠く山路を下りて行く、話は變る勤助の慈愛に守る神の如き勤太則の姿を見るも淺の心もゆるんで来た、心を鬼にもてばとて、此のいぢらしい思愛の細がどうして刀で絶たれよう

「伯父さん、許して呉んれえ」  
「淺手前！は手前は忠次親分に頼まれて来たんだなあ」  
「伯父さん俺が悪かつた親一人子一人の愛しい仲を刀で絶たうとした俺が悪かつた、俺は人間の心持ちを忘れてゐた、アツ、伯父さんなんていふことをなさるんだ、自害をするぢやあなまりだ」

「止めるぢやれえ、淺、忠次は俺の恩人だ、手前の爲にや親分だそれなのに、俺は十手を預る目明し稼業伯父舅として二人の立場は異るとも浮世の義理と人情にや

變りはれえ、淺太郎、心にかゝるは伴の勤太、天地の間に頼むのはお前一人だ、誓へ天秤棒を肩にしても堅氣な人に育てて呉れいよ」

「あ、伯父さん」  
忠次一時の憤怒の情は、惜しき義人の命を奪つた、落ちる涙をすゝりあげ夜道を急ぐ淺太郎は勤太を背負つて赤城の山へ

「親分この首を受取つて呉んれえこれで私も伯父舅も二心のれえ」とがお判になりましたらう」  
「小父ちゃん、ちやんの家に歸らうよ」

「あ、二人は歸らう」  
白布で包んだ首をか、えて父を慕ふて泣く有様を見せられては、道の忠次も肺腑を突かれる思ひに亂れ露の如くに熱涙を絞つた。

「淺、俺の誤りだつた、勤太郎は俺が引受けて屹度堅氣に成人させよう」

「それぢや解つて下すつたか、親分、伯父舅も満更犬死にもなられえで三途の川で喜こんでゐるでムんせう、こうなりや淺の命も今まで通り親分の爲に」

「それぢや許して呉れるのか淺」  
「あ、親分様」

折しも、あれ全山廻る鳴子の響き、  
「アツ、親分捕方だ」  
物々しきは御用の聲、朝霧曇る赤城嵐が國定一家の死闘亂闘、

其翌日の夜は又更けて子供を乗せた一人の馬子は殊に人目をいとうてか明しもつけずに夜道を急ぐ、此の男こそ赤城の山を斬り抜けて信洲さして落ちて行く國定村の長岡忠次、

「勤太よ、まだ起きてゐたのか、今日から俺がお前の父つちやんだぞアア父ちゃん云つて見ろ」  
「父ちゃんよ」

小さな聲で父ちゃん云はれた時の忠次の心に今一念の愛着が胸に迫つて来る刹那待てッと呼んで太刀先鋭く斬り下したる曲者「やい馬子の忠次甲州北澤の鬼の大八が弟伊三郎の仕返しにやつてきた観念しろ。」

「何を、勤太見てろよ、人を斬る

## 浪花節 神並の返り忠

### 吹込者 浪花亭綾太郎

には斯うするのだエッ、ごうだ面白かつたらう、だがなあ喧嘩をしたり人を斬つたりすることあつた人なよくないことだからなあ、勤太よ、お前は堅氣になるんだぞ、寂しく微笑み馬の手綱を引きしめて秋空高く見上げて空飛ぶ雁の群であつてごもく鳴いて空飛ぶ雁の群忠次の心はもの悲しく今の我身も同じこと二十有餘年の半生をその血涙と義侠に報ゆる何物かあらう六十餘年の津々浦々五尺の體の置場さへなく西に東に漂ひ歩かり疲れた旅の寂しさは忠次の心ではなかつたらうか、彼は今二十餘年のその昔百姓與右衛門の伴忠次が馬曳いて馬子唄歌ふた思ひ出に耽りつゝ利根川風に落葉も朽ちる信濃路を寂しく進つて行くのである。

これは伊達家の大破亂を、調べましたお粗末を讀み奉る、此の牢の中へ這入つて居るのは昨夜木家様へ忍び込んだ、御本家少部様の家來の荒木和助と云ふ奴だとな、左様くこんな奴が若館様の一命を縮める様では、御家は閑だ、オイエツ、餘りいつ迄も喋舌居て居るに連れては御上役から御叱言ぢや、行かう、お時計九つでいゝ火の用心、今日鐵之助から討れた疵から熱がまはつた荒木和助、ウゝなる程な、今足輕乗のおつしやる通り、俺の様な下素下郎が、若館様の一命を取る様では、伊達のお家は閑となる、俺は斯うして捕はれた上は命を捨てる事は覺悟ぢやが、今度忍ぶば兄神並、俺は野中に立つた一本杉、死んでも歎く

人は無いが、兄が神並が死んだなら、麻布の飯倉片町に残つた親が歎くぢやう、誰れぢや、こんな處へ来て俺の名前を呼ぶのは誰れぢや、俺ぢや、俺では判らぬ誰れぢや、神並ぢやエツ、われや神並、え、いゝ静にせぬかい、ごうしてこんな處へ来てくれた、少部様のお詞にはな、よく今日の鐵之助のかけた拵間を堪らえてくれた、おそれれば十日早ければ四日か五日のうち此の牢から出してやる、此の酒呑んで今夜の苦しみを忘れて寝ろと仰しやつてな、備後の頼で出来る保命酒、俺が戴いて来てやつた、サア腕を任せ、早う呑め、兄哥よ、俺の様な者でも弟と思へばこそ、兄なればこそ持て来てくれるその保

命酒、仇にやうけぬぞ嬉しいぞ、エイ、男がめそ、と泣く奴があるかい、生れた時にオギヤと泣いて、國王様が御他界の時に一つほろりと泣いて、親に別れる時に泣けばいいのぢや、なみくるといふでくれた毒酒と知るや知らずや荒木和助、グツと呑みし二杯目をなみくうけて中ば呑んで後呑みほしてそつと腕を下に置き、ア、甘露ぢや、少部様に宜しう、少部様、ア痛タ、ウゝ、ごうした荒木ごうした、神並われは俺に毒酒を呑ませたな、何に云ふんぢやい、われは毒酒、やかましいわい、今日は鐵之助のかけた拵間を堪らえたが、明日は非番故松前が此牢へ来て和助を引き出し、拵間にかけて痛さに堪えられ白する、白状されては悪事の邪覺われは殺して来いと頼まれてわれを殺して来たのぢやう、俺も出世がしたいけど、兵部様の若様を伊達の御家の御世續ぎにしてあげたいがいつばいで、忍び込んだ此俺を殺してこいと云付けて、神並に殺してこいと云付けて、様な、そんな性根の腐つた奴に悪事が成就するものか、神並俺が頼みぢや、ごう悪事を、止めてくれ、俺は死ぬのは覺悟ぢやが、今度忍ぶばお前の後、麻布の飯倉に残らしたやつた母様が、さぞや路頭に迷ふぢやう、前車の轡るを見て後車の戒め、神並深き人の心と降る雪は積るにつけて道を忘るゝ、冥途で逢はうな、やましいはい、わいの様な奴の意見でな悪事を止めるくらいなら、關脇まで取りあげた角力をやめて悪事に血判しやれえわい、死ぬなら勝

手に死んでうせい、大膽不敵の神並は和助の死骸を後に見て、急いで戻つた仙臺飯、話が別れて悪人輩、勘左衛門の歸りを待つて酒盛り、只今歸りまして、いいます、和助はどうした、悪事を止めくれなぞと云ふて、死にまして、いいます、者共和助が死んだ、良い氣味ぢや笑ふてやれ、ハ……

鳥と云ふ鳥は色の黒いでは憎くまれないが口が悪くて人に憎くまれる、是は少部の悪口です、これへ參つて一杯呑め、有難ういいます、弟が血を吐いて死ぬのを見れば酒も呑まれません、是れでお暇下さりませ、お先へ御免さ神並

### 浄瑠璃 堀川 猿廻し

吹込者 三味線 竹本越登太夫 竹澤團六

同じ部も世に連れて田舎が増の薄煙堀川邊に住居して後家の操も立月日琴三味線の指南屋も合の手連れ氣もつれを保養がてらの薬風呂煽ぐも我を濳園扇目さへふ自由な暮しなりお鶴さん嘘ぞ待選ふにあらふ喃として何やらの淡であつたヲ、それ鳥邊山アリヤしい心中事會にでも弾くのならお前は女の方おしげさん男の方とこうか、け合ひで諷ふがよいぞ、ドレ、お繁さんの代りにわたしとかけ合ひしき女肌には自無垢や上に紫藤の紋中着緋紗綾に黒縹子の帯年は十七初花の雨にしほる、立姿、男も肌は白小袖にて黒き袴子に色淺黄うら甘一期の色盛りをば戀と云ふ字に身を捨て小舟さへ取付鳥邊

は、一間へ這入り膝に手を置き首かたむけ、許してくれよ、弟、そなたが最期にこの兄が、善心にたちかえると云はなんだのが氣にかゝる、和助が死んだから良い氣味ぢやとば、エーあんまり御主人様、可哀さうぢやと一言云ふてくれたとて驚も鳥も笑やせぬ、俺も死んだらかう云はれる、死んで悪く云はれるなら、俺はもう悪事は今日限り、やめて少部の悪事の密書、盗んで伊達安藤宗重、白石の片倉小十郎様へ願ふて出してお取上げに預つたら切腹して、死出の山路の高いのも一緒に往くと、神並の返り思はこれにとめて一寸一息。

もなし、鳥邊はそなたと死に行く身の後髪引く三味線は祇園町茶屋のやま衆が色酒に亂れて遊ぶさ、はき合あゝ面白さを見る時は「イエ、エ、それでは」と聲にしほれが無いはいな、あの面白さを見る時はとこふ唄ひなされや「アイア、イあの面白さを見る時はヨシ、染ぬそなたと某が去年の初秋七夕の座敷踊を、こつてて忍び逢ふた事思ひ出し、サ、今日はマアそまで、ハ、精が出る程有つて、きつ手も廻り出したモウ、何處で弾きななかつても恥かしい事はないぞ、え聞いて笑顔の片男波「文明日といふ沙にわたつて立き出たしりや、言葉にわたつて立き出たしりや、聞えませぬ傳兵衛さんお言葉無理とは思はれど、そなた逢ひかゝる始めより末の末迄云ひかはし互に胸を

### 浪花節 小金井小次郎

吹込者 木村友衛

明し合、何の遠慮も内證のせはしられても恩にきぬほんの夫婦と思

生きて俠骨、こゝに小次郎の一席を下總船橋大神宮様を、參詣致した上總木更津新宿の新兵衛親爺が裏山づたいで差しかつた鬼怒川と巻割の海岸端、右は見渡す大海原、砂つ原にと腰下して、取り出した煙草入、ドレ、大神宮様お詣りして此處まで来て喫むは、一ぶく千兩、なんとも云えぬ、氣持ぢだ、父つさん、オツ吃驚した、なんだ親方、何にも驚きなさらには及ばぬ、俺は決して父さんあやししい者ぢやござんせぬよ、お前様は先刻船橋の大神宮様を參詣してゐた、其間の内に豊州の小金井小次郎が無事に戻つて参りませ、此方は拜んで居なすつたが、其の小次郎と云ふ人を父つさんお前は御承知か、え、知つてると云えば知つてゐる様なもの、未だ俺は小次郎親分にお目にかゝつた事がない、逢つた事のない小次郎が、無事に戻ります様、すまぬ、父つさん其譯を一番俺に聞かして、くださる譯にはいきませぬ、話して話されな程の事でもなし、折角のお尋ねぢやまあ親方聞いてやつておくんせえませぬ俺は上總木更津新宿の、新兵衛と云ふ者だが、去年、患はれ、醫者よ薬よ加持祈禱と、手を更へ品かへしてゐたが、妾の病氣は癒られぬ、ついでに冥府の旅路となる七日七日が二七日三七日過ぎて三十五日や四十九日と、すまして後が俺が又、

ふ物大事の、夫の難義命の際に振捨て、女の道が立物か、

看病疲れて床につく、始めの内は村人が、寄つてたが、つてやれ新兵衛それ新兵衛と世話してくれお方もあるけれど、やつぱり他人の寄り集り、仕方が無いから八王寺の、娘の處へ手紙を出せば、梨の薬で音沙汰はなく、親だとく、あきらめて、居りました、丁度それから十日目に、ひよつくり女つ子から来た手紙、取る手おそれと開封して、中の文字をば見たなれば、涙で書いた沁み書き、親が病氣と聞いたから、直ぐ様行つて看病はしたいけれど、共お父さん、御主人様に借があり、其借拂はにや立たしちやくれず、ましてやこれが一里二里なら、兎にも角、海を越したる木更津の出るにや出られぬ體の鳥、來ぬと恨む父様より、行くに行かれぬ、娘の心許してくれと書いてあつた其時に、俺が如何にも悪かつた、許してくれよ、れ娘と俺は陸乍ら娘にと、咥びしてゐたら丁度それから八日目に、ひよつくり女つ子戻つて来た、お父様と云ふ聲に、俺は吃驚して、オ、われは娘、よくまあ無事で歸られた、どうして無事で歸つた、と尋ねて、お父さん喜んでおくれ、今度徳川龜屋へさ宿り合せたお客様、豊州で名うての小金井小次郎と云ふ親分、娘が飯のお給仕に出た其時に、なんだか手前涙つぽる、どうした事かと尋

ねられ實は斯うだと話をしたら、偉いぢやないか、其小次郎親分が、必ず共に心配するな、お前の借金俺が残らず拂つてやると、娘が借りた借金をすつかり拂つてくれたのみならず、國へ歸つたら父さんへ給でも買つて持つて行けと持たして、くれた其の金が、一分や二分と違ふて、大前まとまる五兩金親子の合はせて拜みました此方につけても、親分へ足を向けたら濟まない、と思ふぢやないか、尋ねる小金井親分は、何所に居るや、其行衛さ、え、判らぬ事、此方に居やしません、彼方此方かと、ぐるぐる廻つて、一晩中寝やせぬ、おかげで體も助かりましたせめては國へ行つたならば様子が判らうと留守は娘に預けておき、わざと、豊州の小金井へ行つて尋ねてみたならば、尋ねる小次郎親分は此の三月に囃嘩をして、兎狀持つ身の情けなかつた一人のおふくろ様に勘當された小次郎親分は、五尺の體の置き場、四尺九寸となりつまつた、兎狀持つ身と聞きまして、それ故是非共小次郎親分が無事に戻つて参ります様、俺は拜んで居た、ハ……ア親方笑つて下さる、最前からの様子をば傍で聞く身の小金井は、思はず落す玉の鬘、故郷の方に手を合はせ、それですつかり様子が判つた、父つさん、な、にまだ判られぬ、五尺の體の置き場に困り四尺九寸となりつまつた、兎狀持つ身の小次郎は、誰でも、兎狀持つ身の小次郎は、誰でも、小金、静かにこれえが、エツ、云つちやなんねえが、丁度時間となりまして、餘りお長くなりまして、先づは是にて預かる次第なり。

筑前琵琶 四條 暇

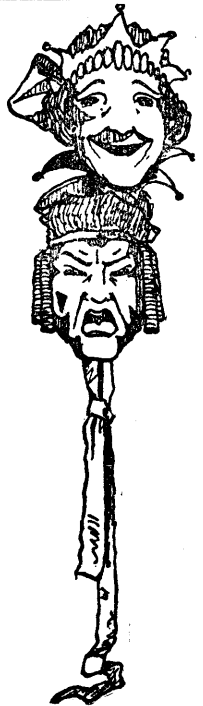
吹込者 法明山 秋根 旭惠

かしこき邊りの仰せに依り  
辨の内待と呼べられたる  
見るも映ゆき上臈を  
下し賜ふとのりければ  
正行かたく辭し奉り  
とても世に

なからふべくもあらぬ身の  
かりのちぎりを  
いかでむすばむ

かくなん一首をさしげおき  
これぞ最後の参内なりと  
名残惜しくも皇后を出で  
やがて先帝の御廟に拜別し  
如意輪堂の門扉に  
矢じりを以て姓名を記し  
其すえに

涙らじと豫ておもへば梓弓  
なきかすに入ら名をぞとむる  
絶命の和歌を刻付けて  
これにて思ひ残すこと更になし  
いざ諸共に勇しく  
賊と雌雄を決せんと  
三千餘騎を引率し  
正平三年陸月初旬  
四條暇に向はせける  
此時已に高野師直は  
河内の國に押入りて  
飯盛山の麓に陣し  
六萬の大兵を魚鱗に備え  
武威殿軍に見えけるが  
素より死を極めたる捕勢  
かゝる大軍をも物ともせず  
生駒おろしに菊水の  
清き流れの旗に  
打ひるがへし悠然と  
四條暇に指し掛れば  
賊兵四方に群りよ  
唯一探とあせれども  
心もかたき楠の  
及風に賊は斬され  
暫し勝負も荒磯の  
沸きもかへらん許りなり。



お伽歌劇 鼠のクリスマス

吹込者

小島 洋々  
澤野 文子  
澤野 菊子

赤いローソク銀の玉  
緑の櫃につるされた  
いろとりん／＼の贈物  
明日は嬉しいクリスマス

娘 明日はクリスマスだといふん  
で、人間の子供達は嬉しさに  
遊んでゐるのに、此の天井裏に  
はサンタクロースも来てくれな  
い私達は本當につまらないわ  
女中 本當に人間の子供はごうし  
てあんなに幸福なんでせう、え  
え私達も負けないで、一つ騒い  
でやりますせうよ。

天井裏のお嬢さん  
お眼は真紅でルビー色  
肌はすべ／＼ 二重よ  
長い尻尾の裾曳いて  
踊を踊るの美しさ  
娘 お止しつたらお鍋、そんなお  
べんちやらなんか聞き度くもな  
い。  
女中 オヤ／＼骨折り損とはなさ  
げないでもまあ怖らしいお嬢さ  
ま  
娘 エッ／＼さいつたら、  
エンサカホイ ヤレサカホイ  
重い袋は大黒様の

寶のお譲り有難や／＼  
下男 お嬢さま只今  
娘 忠告、何を持って来たの  
下男 ヘイ、まっお嬢さまのお好  
きな鯛の乾物次は大根の尻尾、  
お餅のかけらに唐もろこしあの  
玉子を持って来やうと思ひまし  
たがあれは一人ではむづかしい  
ございます  
娘 チョコレートにミルクキヤラ  
メルは、  
下男 ヘイ、そんな物は兎ても、  
娘 ない事があるものか、つい目  
の下にあるのに何故見えない、  
下男 エッ／＼お座敷ですか、あ  
すこばかりは眞平／＼  
晝間の様な花電灯  
ピカ／＼光る金モール  
金目銀目がキラ／＼光る  
猫目の關の恐ろしや  
猫ちや／＼ゴロニヤン／＼  
猫にもいろ／＼ござる  
可愛い白猫お三毛にお玉  
怖いドラ猫カラス猫  
猫 遠からん者は音にも聞け近か  
らん者は、目にも見よ、今天下  
に名高い三毛助猫とは俺れがこ

とちや、ヤツ臭いぞ／＼臭い  
ぞ  
一同 助けてくれーきやツ  
娘 アラ其處に平太張つてゐるの  
は忠告ぢやないの忠告何をして  
ゐるんですよ、  
下男 へ、へ、ごうぞおた、  
助けな、  
どうぞ猫さん御免なさい  
命ばかりはお助けな  
南無妙法蓮華佛桑原／＼  
娘 馬鹿だわね、猫はさつきの音  
で逃げた、ぬないちやないの、  
下男 エッ／＼猫はぬない、チョ／＼  
笑談でせうあれ／＼あすこに  
娘 エッ／＼あれはサンタクロースのお  
ぢいさんだわ、あ、解つた、さ  
やさつきの大きい音はおぢいさ  
んが屋根から落つちた音なん  
だわ  
下男 あ、眼を廻はしたんですね  
オーイサンタクロースの  
二人 おぢいさんやい  
サンタクロース、サム、サム、  
此處はごぢやな  
娘 おぢいさん此處は家根裏の  
鼠のお家よ  
サンタクロース 何屋根裏、あゝさ  
うが、俺はさつきの音のやう  
に煙突から這入らうとして手な  
かけると煉瓦がボロツと取れる  
拍手にグワ／＼と天窓を踏み  
破つて落ちたまでは覚えて居る  
が、イヤお蔭さまで助かつて有  
り難う、ドレ何か御禮をさませ  
うの贈物ぢやが、これを御禮にあ  
げるから年に一度のクリスマス  
を祝つておくれ  
娘 おぢいさん有り難うこれで私  
達も天井裏のクリスマスをお祝  
ひ出来ませうサア皆でお祝ひし  
ませう  
赤いローソク銀の玉  
いろとりん／＼の贈物  
明日は嬉しいクリスマス

童謡 ねんねのお國  
ねんねのお唄はよいお唄、ねんね  
のお唄を聴いて、ねんね、桃のお月  
さまがすすみます、ねんねのお國へ  
まゐります。  
ねんねのお國は花祭、夢から夢へ  
とにほひます、小鳥も鳴きます  
歌ひます、お雛子なんどもきこえ  
ます。  
ねんねの祭へゆく人は、ちちちち  
丘からつゞきます、小さなお馬に  
花の山車。踊のお舟も通ります。  
ねんねの祭を見る人は、何だかう  
れしい人ばかり、いつだか、ごん  
でか、ごうごうか、何だか見たよ  
うお方、いつ、ねんねのお母さま  
なる、お手々を曳かれて、祭日て  
はぐれて泣いてりや目がさめた。

童謡 栗と小栗鼠

吹込者 小橋みち代

栗の實が落ちた、それ見て小栗鼠  
ちよ／＼拾うつた、  
栗の實は甘いな、ちよいと立つて  
小栗鼠むつくり／＼喰べた  
風吹いたカサ／＼逃げ出して小栗  
鼠お母さんのお乳にとびついた

童謡 虹と仔馬

濡れる、濡れる、仔馬、虹の輪の  
下を、連れ連れ駆け抜け。  
跳ねる、跳ねる、仔馬、川瀬の石  
を、飛び飛び越えて。  
濡れ、濡れ、仔馬、虹の輪の中で  
雲雀が、雲雀が啼いてるぞ。

童謡 落穂ひろひ

落穂ひろひが、田にまだ一人、  
あゝみかみて、あちこち歩む。  
鐘が鳴るのに、田にまだ誰か、か  
まげりかづいて、あちこちあさる  
ひいとりの、ひろうて、あちこち  
暮れた。  
落穂ひろひよ、田を早やあがれ、  
宵の明星が、あちこち、ちろり。



# レコード文句集 (正月新譜)

哥澤 わしが思ひ

吹込者 芝勢以金

わしが思ひは三國一よ、富士の深山の白雪積りやすとも解けはせぬ、浮名立つかや立つかや浮名、今は浮名の立つも嬉し人の心はあひえん奇縁、一せつからだもやる氣になつたわいな、

哥澤新 紫

紫のゆかりに似たる書初に、ほの／＼告ぐる鶯の、音にほだされし縁の糸、戀の上下のみすじだて、花の寒さに春風を、いとふて暮すぢやないかいな。

新ぢうた 黒 髪

吹込者 琴 三味線 勇

黒髪、結ばれたる思ひをば、解けて寝た夜の枕こそ、一人寝る夜の仇まぐら、合袖はがさしく妻じやと云ふて、合……  
愚痴な女子の心と知らで、しんと更けたる鐘の聲、夕への夢の今朝さめて、床となつかし遺瀧なや、積ると知らでつもる白雪。

江戸小唄 初 雪

吹込者 唄 美之助 爪彈 田村てる葉

初雪に降りこめられて向島、二人

が仲に置炬燵、さきげんの爪彈は、好いた同士のさし向ひ、うそが浮世か浮世が實か、誠くらべの胸と胸、

止めても歸る

止めても歸る、なだめても歸る歸るの、三ひよこひよこ、とんだ不首尾の裏田圃、降られついでに夜るの雨、

空や久し

空や久しく、雲らるゝ、ふらるゝ、雨もはれやらぬ、ぬれて色ます青柳の糸のもつれが、氣にかゝる、

今朝の別れ

今朝の別れに、圭の羽織がかくれんば、雨があんなに、降るわいな青田見なまじ、がたくと啼く蛙

いきな鳥

いきな鳥は夜明けにや啼かぬ、アチヨイトナ、野暮な鳥はめぢやに啼くごつこいしよと飛んで来る、

小唄 博多節

吹込者 唄 富田屋 喜久治 糸 大和屋 千代羽

渡邊の、綱はきれても、わじやまだきれぬ、ヨイシヨ、ごなたが御意見なされよとも、きれるつもり

で惚れはキタドツコイシヨせぬ世の中好いた同士で暮しやんせ、ハイ今晚ハ……

小唄 大島節

▼アー私しや大島ごぢんか育ちよ胸に煙は絶えやせぬよ、  
▼アー島と名がつきやどの島も可愛よ、わけてとしまはさなな可愛よ、

▼アー竹の一本橋は細くて長うてしなくとほれて危いけれどよ私と貴方と渡るにや怖くないよ

▼アーこゝと大島は地續きなれどよ、逢ふて酒盛りサーしてみたいよ、

▼アー四海海波でもきれる時やきれるよ、まして四疊半は尙の事よ、

俚諺 大漁節

吹込者 美代吉連  
▼一つとせ、一番漁した優勝旗、立て、新造の舟下し、この大漁だネ……  
▼二つとせ、ふしぎに漁するおぐろ舟、續いて行するつきん棒、この大漁だネ……  
▼三つとせ、艀の沖から魚川岸へ通よわす舟の賑はじさ、この大漁だネ……  
▼四つとせ、夜る晝あげても揚げきれぬ平田も賣場も魚の山、この大漁だネ……  
▼五つとせ、何時來て見てもこの濱は、まぐろやかじきの生きのよさ、この大漁だネ……  
▼六つとせ、無理な日和いとはすに、機械で乗りだすまぐろ舟この大漁だネ……  
▼七つとせ、名高き魚川岸一面へ

まぐろやかじきを積み送る、この大漁だネ……

▼八つとせ、はたからばたまで魚の山、積んで又来るキワダ舟、この大漁だネ……

▼九つとせ、此の川岸守る水神も御利益あらはせし、この大漁だネ……

▼十とせ、魚屋仲間の景氣よく此の川岸廻る賑ざやかさ、この大漁だネ……

俚諺 磯 節

▼磯で名所はおあらい様よ、サイシヨネ、松が見えますほの／＼と、コツガネ、松が見えますイソほの／＼と、テヤ／＼と、イサ、カリン／＼スカレチャド／＼、

▼舟は帆で持つ帆は風でもつ、サイシヨネ、日本帝國海でもつ、コラ日本ネ……帝國イソ海でもつ……

▼私に逢ひたけりや音に聞こえしおあらひそ下へ、大きな石をかきわけて、小さい石をかきわけて、こまかい小砂利を紙に包んで三尺小窓の小障子の影から、バラリ／＼とまかじやんせ、其時私が推量して、雨が降つて来たといソ逢ひに出る……

滑稽 小曲 おかよ十八

吹込者 榎木龜次郎  
▼おかよ十八娘のさかりにつこり笑へば金齒がちらりちらり金齒が光りますよ、  
▼おかよ十八島田に結ふてだれに見せうとて金齒をいれた

俺が女房

▼俺が女房は世界でひとりきりやうがよいので俺や苦勞する人になれない苦勞する  
▼俺が女房はけんかすきけんかすきだが可愛い奴よ可愛い／＼で俺や苦勞する人になれない苦勞する  
▼俺が女房は働きのよ働きのよがうわき者うわき者故今日此頃は人になれない苦勞する  
▼俺が女房はダンスが上手ダンス上手で夜おそくまで踊つてゐるので俺や氣がもめる人になれない氣がもめる  
▼俺が女房は夜がすき夜がすき故朝寝坊する朝寝坊するので俺や腹がへる人になれない腹がへる

もぐり

痛い／＼虫齒が今朝抜けたんだか淋しい口の中お砂糖なめてもまだ淋し餅菓子節ころカステイラ喰べてもなめてもまだ淋しもぐり／＼婆様淋しがる齒なしでもぐり淋しがる

雨の音

▼トン／＼／＼／＼雨の音 蝠傘はトン／＼／＼／＼早く歸ろと急げばぬれる、

# 聽音記新聞

發行 余 行 録  
編輯 人 子  
録音 記 子

## 日本に於ける音曲界の

### 名人の名曲を發表した

#### 日東蓄音器本年時頭の新譜 延壽、小三郎、觀世宗家の顔合せ

毎年正月になると各蓄音器社がに立ちしむることは不可能なことを競つて賣出しレコードの撰長に苦心するのである、何故是等二名人がラヂオを削つて發音音譜のプログラム編成に努力を拂つたことだらうが、何と云つても延壽大夫、小三郎、觀世元が故に自己の藝術を傷つけられることを恐れてゐるのである、是はラヂオの場合のみならず蓄音器の場合も無い譯である。

正月新譜を第一回第二回の二度に於ち第一回は吉住小三郎の「越後獅子」一枚の録音を貫録として同社が最近製作に着手した民衆本位の最廉價レコード十二枚、第二回は觀世元延壽大夫の「北州」並に觀世元の「高砂」を主眼に古軼太夫の「太一」芝金の哥澤等四十八枚のレコードを發賣すると云ふ状態である、斯くの如く完備した藝術的レコードが、一時に少ラリと列べられたことは、日東蓄音器としても未曾有のことであるから是れ以下の二流三流處の藝術家を擁して立つ他社が、日東蓄音器に追いつくとして夫れは蠟燭の斧に等しく到底實現し得べきことではない。

### 吹込 感想

近來蓄音器の家庭化に依つて、物質文明の質社に立脚し人々の荒みゆき融和せる生活の惱み融和せる生活の顯著な事となつた、従つて是等のレコードの要求に適應したるレコードの製作は、私共の携つてゐるレコードの音楽が此の方面に於て比較的輕視されてゐる事である。

### 楯城護

我が國民性に據つて培はれ、正しい傳統を有する組織に於ては邦樂中最も優たものとされ、邦樂としてのみ其の發達が遅々としてゐるのであらうか、思ふに其の原因は琴そのものがレコードに吹込み難いからであつて、是に就ては各蓄音器社が如何に研究心を盡してゐる、處が最近日東蓄音器社の技術部が其の研究に見事成功

し、完全な琴曲レコードを製作し得られる様になつたので、當事者たる私は此の盛大な技術的努力に對して滿腔の感謝を捧げずにはゐられないので、同時に日東蓄音器社の斯うした技術の向上は琴曲界に取つても誠に喜ぶべき慶賀すべき事であつて、邦樂の普及發展を益々助長せられるものである。

他に數曲を吹込んだが、數日の後テスト盤を聴くと及んで其の出來榮の完全なのに驚嘆すにはおられなかつた、音色の如實に表現されてゐること音調が正確に再現されてゐること等全く過去に於ける琴曲レコードに對比して隔世の感を覺えた。そして其の一面に未熟な私の努力がせられたこと云ふ善むもあつて同社が今後尙一層精進の歩みを踏み進め、琴曲の家庭音樂として其の眞價を廣く一般に普及せられん事を切に希望して置く次第である。

にも同様だつたこと、延壽、小三郎、觀世元の吹込みをするに、後初めて吹込を承認したのであつて、此の事は既に世間周知の事實

### 謹賀新年

大號からは誌面の内容を充實するに、刷新を計るから等と前觸れ許りが、刷派で、其の實、少しも言行の一致せぬのが、兎角雑誌編輯者の通弊であります。其處で私共は今後、只何かの刺戟がある度に刺戟された丈の何ものか、誌面に現はして行き度いと云ふ事、申上げて置きます。大正十五年一月元且

### 日東タイムス社

「高砂」が、論曲二百餘番中の首位にあるは、過く人の知る處であつて、協能と云つても社寺の靈験を説く他の神事能と異り、夫婦和合、壽長遠、國土安穩等の意を述ぶ協能中最も重きものとせられ、協能位も極めて崇高にとり、長閑な中に聲緩みなく論ふべきものなのである。而して協能は強く神々しいと云ふのが、全曲を通ずる精神で三番目物な味の充ちて居ると同時に寸時も膝を寛がせぬと云ふ謹嚴にして清淨な感じの剛たる高砂は、曲が目出度く、又剛吟中文句が目出度く聲が目出度く、其處で觀世流諸曲音譜會では正月をトとして、宗家觀世元滋氏に依り吹込まれた高砂一番全曲五枚録を發賣した。

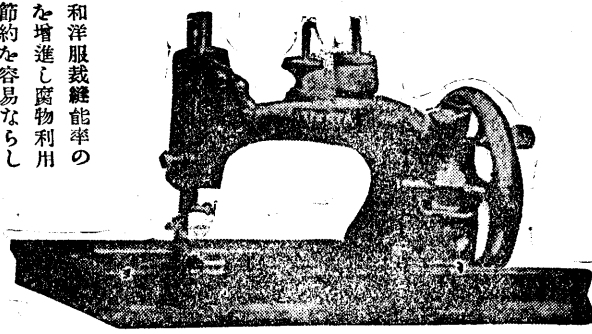
## 高砂

### 觀世元滋氏の協能中の協能物

## 賀正

### 獨逸最新輸着品 家庭用ミシン

美風なる蓋付、角刺定木、椽取器具、糸自由巻器具、其他十種附屬品付



和洋服裁縫能率の増進し、廢物利用節約を容易ならしむる完全なミシン、機械の堅牢と精巧なるは獨逸製の特長、今や獨逸の總ての家庭に常備され、又獨逸各女學校教授用として好評噴々

特價 金四拾五圓

大阪市北區堂島中一丁目 婦女世界社代理部

電話北五五八番





顔で笑うて心で泣いて  
辛い別れの涙が光る  
コルグスキー嬢のロマンス

十一月廿一日の午後—神戸メリケン波止場の第三棧橋では四時に解纜する大連行の船が出帆の用意を以てある、邊りには船荷を積み込む人夫や乗船する人、それを見送る人達が慌しく行き来してゐる、棧橋の起重機は激しい軋音を立て、落ちつゝの人々の頭を自案に掻き廻す。  
恠うした焦らだたしい雰圍氣の中にあつて、先刻から二人の若い男女が一等遊歩甲板の欄干に凭れて何か類りに話し合つてゐる、二人共瀟灑な服装をした異國人で、男の方は見送りに來てゐる人で、女はあちらから出帆合圖の銅鑼が鳴り響くと女と來強い抱擁をして棧橋の方へ下りて來た、そして女は甲板に男は棧橋に佇んで、絶えず微笑を交し乍ら出帆の時を待つてゐたが、恠うした二人の顔には何時しか離愁の色が濃厚に現はれてゐた。  
體て出帆の汽笛は秋の空に物憂さうな餘韻を引いた、船と棧橋の間には徐々に距離が出來てゆく、此の時甲板にゐた女の手から彼等の愛を象徴してゐるもの、儂な真紅なテープが投げられた、棧橋の男は手早くこれを受け取つて、テープの一端に熱い接吻をした、暫くの間は出で行く船と棧橋の間に盡きの名残りがある、船の津が消えてゆく頃、船の影も又遠く彼方の水平線の中に没して仕舞つた。



談漫畫相人  
氏吉柳田澤

記者が舊伯の手から澤田柳吉氏の漫畫を手取つて直ちに天王寺町の澤田氏宅を訪問すると長唄三味線をペンペーパーンと弾いてゐた澤田氏、相變らずの上機嫌で記者の示した漫畫を見て「こんな漫畫を書かれちゃ天晴れ天下の業平を氣取つてゐる僕の估券を下げるぢやないか、僕はイヤだよ」と罪のない抗議を提出して、それから次第に澤田

その時棧橋に立つて慨然としてゐる男は、邊りを振返つて誰もゐないのに氣が付くと、淋しさうな顔をして大股にもと來た道を歸つて行つた。港の町の秋は黄昏れ時であつた。異域の地を恠うしたコルグスキー嬢の青年男女、女はニッソトアルベルトロザノフ夫人の吹込を聴き、コルグスキー嬢で、男は露國ソビエ報等する。

るピアノストとしてベートビンの難曲を朝飯前にストラク弾いてのけたと云ふ凄腕は其の後編が上にも銀えあげられ現在日本では氏を措いて他に是丈の技術を持つピアノストは鳥渡見當るまい、こト程左様に非凡な澤田氏の凄腕に近頃恠うした風の吹き廻しか三味線が操縦せられてゐるのである

氏一流のダダ氣分に満ちた漫談が淡々として盡きると云つた調子で湧出する其昔日本に於

は語らないから一つ日本音楽を遣らうと思つてゐるんだ、それも有りふれたものぢや仕様がなにか日本のジャズ音楽を拵えて遣らうと考へてゐるんだ」と候々形勢が不穩になつて來るので「ヤにフオクストロット吾妻八景だのワンステップ三千歳と云ふ様なものが出來る譯ですれ」と記者は前哨を振つて置いて澤田氏の大阪に對する住み心地を尋ねて見た、すると記者の豫期に反して大阪を猛烈に禮讚して尙襟らのとつた具合、「僕は震災以來大阪へ來てゐるが、全く大阪の人間は偉い、第一文明人としての諸條件を完全に具備してゐる交通機關もその本質的使命を忠實に努めてゐる電

ツト政府の海外派遣音楽家レオニッドセフチエウク氏であつた、二人はモスクワを旅出して日本に來るまで西ビルの旅宿に於ても不思議と一緒になつた、そして日本へ來てからも矢張り一緒になることが多かつた。其の内に若い血潮の高鳴る二人の間には遂に戀が芽生えてゐた、そして二人の噂は神戸に留の外人間で非常な評判となつた、共二人が愛に惹かれて陶酔してゐたのも東の間で、ロザノフ夫人は大連での演奏契約の日に近づくに來たでコルグスキー嬢と共に出發しなければならなかつた。そして夫れを終ると一度モスクワに歸へることになつてゐるので、此の日の二人の別離は本當に辛いのであつたに違ひない、因にシエフチエウク氏のことに就いては次號で又

神戸で最初の  
日東演藝會  
定刻前締切の盛況  
舊臘十一日午後六時より神戸音楽館に於て、神戸では最初の日東演藝會が主催の日東演藝會が開演せられた、何分第一回の催しのこと、非非常な人氣を博し當日は定刻の六時と云ふに既に滿員の盛況を呈し締切の歌むなきに到つた。  
當日の番組は電話、ハーマニカ、浪花節、三益堂舞踊、新地唄、江戸子唄、義太夫講、何れもニッソトレノコで馴染の深いもの丈に、非常に喝采を博した、殊にあい豆の新地唄と美之助の江戸小唄は新しい趣向の凝されたものなので、當日の自眉たる駒大夫の義太夫三勝半七と共に満堂急激の如き拍手を以つて迎えられ午後十時盛況裡に閉會した。

全國致る處の  
リカルエンホニコン出來!  
樂器店に有り

複音二十穴 ¥7.00

本樂器の特徴は我國ハーモニカ界の革命者  
佐藤秀郎氏吹込の日東レコードに依つて  
— 確證せられり —

誰にでも直ぐ出来る

新しい懸賞答案募集

締切大正十五年二月末日  
發表本誌四月號誌上

賞品

一等 ニットー號蓄音機新型五號  
ニットーレコード黒赤五十枚  
スワロー印蓄針千本 二名

二等 ニットー號蓄音機新型四號  
ニットーレコード黒赤二十五枚  
スワロー印蓄針千本 三名

三等 ニットー號蓄音機三號  
ニットーレコード黒赤十五枚  
スワロー印蓄針二百本 四名

四等 ニットーレコード 黒五枚 赤十枚 五名  
五等 スワロー印蓄針二百本 千名

應募規定

一、答案は下記答案用紙に記載のニットーレコードのレコード番號に該當する曲種曲名吹込者の名前を解答記入して下さい  
一、答案用紙は下記刷込みのもの及び是と同形式の自製用紙を使用して下さい  
一、答案用紙には條件として必ず大正十四年十二月より發賣のニットーレコードに添付してある日東蓄音器會社の小型圓形

商標紙を貼付して下さい。  
一、小型商標紙の貼付なきものは無効となります。

一、答案用紙には刷込新聞或ひは雜誌の名前を記入して下さい。  
一、正解者多數の場合は抽籤を以つて入賞者を決定します。

一、宛名  
大阪市住吉區上住吉町神社南門前  
日東蓄音器會社懸賞係

此の場所へ貼付用紙を貼り着けて下さい

レコード番號	曲種	曲名	住所姓名	代表吹込者一人
一四二九				
一二四八				
一四〇〇				
一一〇〇				
一一〇七				
一八二六				
一二二八				
七二〇				
一二四二				
一一六三				
一六二二				
一三八八				
一三四四				
一三一一				
一三九〇				

新聞紙名  
ニットータイムス聽音記新聞



(る限に書端迎歡書投)

▼お、嬉しきことと私達の希望は聞き届けられた、レコードが出たと聞いただけでもぞくぞくする吉住小三郎軒屋六郎師長頃越後糞子あ、早く手にして聞き度いものだ(京都研精會狂)

▼吉住レコード賣出したを新聞で見ました丁度一年振でしたれその間うがごんなに待遠はしかつたでせうから買ひに出かける處です取り敢えずお禮迄(大阪大川町丁生)

▼哥澤の我物と更けて逢ふ夜の二曲は箱枯れの夜長の連々に聴くに持つて、この好出し物と思ひました其曲の氣分が充分理はれてぬました芝爲枝さんの落ついた節廻しは毎度拜聴しても飽き出ません(大阪野澤すいた同志會)

▼シウマンをシウマイと違へる老人ばかりが聞くのではないから洋樂レコードには作曲者の名を是非入れて欲しい日東の大手柄であつた日本交響管絃團のレコードには解説が付いて居た又モリスダンスや炬火の踊りに解説の要する程の管絃樂をぞくぞく出して欲しい(山口縣洋樂黨)

▼義太夫レコードに於て斷然他の追従を許さざる我日東よ東京のラヂオファン嗜好調査に依れば義太夫は地の音曲を遙に見下して堂々第四位を占めたとは實に愉快では

ありませんか關西本場ならいざ知らず關東に於てこの一大快報に接した吾々義太夫狂は全く隨喜の涙を流した文樂を年に一度聞くか聞かれない吾々に取つてツバメレコードは實に内生活の糧とも云ふべきもの(千葉市 義太夫狂)

落語の梗概

先づお目出度うと申し上げます、叔吉例に依りまして桂春團治の落語「初天神」のあらましを。今日は二十五日初天神ぢやと云ふので頓馬なおつさん「嫌羽織出せお参してさる」と云ひました處近頃このおつさんの素振を怪しいと思つてある女房はおおれと羽織を出しません「あなた何處へ行くね」「初天神に」嘘ばつかり騙つばい行燈のかかつた天神さんやろと違ふほんとの天神さんや」と云ひ争つてゐる時この親にしてこの子あ

からです其の中でも旭恵さんの嚴の的と日東ツヤズのワラーワラーを紹介して下さつた方に對して深く感謝してゐる次第ですどうか此の後とも私の爲にレコードを決定して下さい(紀伊 かのぼる)

凡でした所謂啼かす飛ばすといふのでせう、大飛躍の前には必ず足を屈しますから私はこの意味に於て大いに期待します小三郎や延壽を出す日東だ必ずや近き將來に於て斯界を震撼さす可き一大傑作を彗星の如く出現さすことだらうて(大阪モテグロモチ生)

▼新ぢうたと云ふ名は餘り聞きませんでしたがレコードを聞いて始めて合點がゆきました、實にあい豆さんの聲はい、聲ですれ竹の縁と云ふやうな子供が學校から歸つて来て「父つちやん天神さんなら僕も連れてつてよ」とせがみつく女房大いに喜び「あ、坊も連れてつて貰ひ」と双方より攻撃を受け事ここらに到つてはもう破壊とおつさん「よし連れてつてやる」と和睦を申し込み子供を連れて天神さんに行つた爲に非道い目に合はされんと云ふ子供を中心にした極無邪氣なお話、その子たるや春團治一流の舌先より生れ出る子供さんななませた面白子供でせうか例に依つて囃鳴物入りの賑かな二枚續きのレコード。

▼伍東宏郎氏の映畫説明「小橋小平次」には全く感心いたしましたその脚色法又和洋管絃樂など申し分がない十誠以來の名レコードと思つてゐる(飯塚 あたみ生)

▼十一月の浪花節管我兄弟は何度聞いても良い浪花亭綾太郎さんは良い聲だそして節廻が情味溢ふれて淨曲味を帯びてゐる同師のものを今後共出して下さい(日向高岡町五町落合兼政)

▼私は今迄に今度の琴曲六段程に

真くはいつてゐるレコードを聞いたことがない大きくはいつてゐると云ふよりむしろ實物を聞いてゐると云つた方が早い琴曲好きの方に推奨する(名古屋吃齋生)

▼もう歌劇抜粋や和曲を聞いて喜んで居る時代は過ぎたと思ふ此の意味で日本交響管絃團のレコードは我々を喜せしめたものだ又あの様なレコードを出して欲しい尙その節レベルもその時分の如き親切をもつて(玄島好生)

▼江戸小唄の美之助さん愈々聲が冴えて來ましたれ實際江戶小唄の人氣を一人り背負つて立つてゐる尙此の上の努力を(某生)

▼童話浦島太郎は確に新機軸を出してゐる童話の中に唱歌、鳴物管絃樂をふんだんに使つてゐるがそれが又大變面白く聞える子供達はもう大喜びしてゐる(京都好生)

▼書生節の唄ひ手が今少し何とかなりませんか寺井さんも良いけれど映畫説明の伍東さんと云ふように又代つた人に願へませんか幾ら良い人でも同じ人では終に飽きが來ます(大阪千日生)

▼公會堂ですつかり僕を魅了してしまつたロザノフ夫人の聲を今又レコードで聞きました何度聞いてもふるひつきたい様だ唯悲しいかなプロであるため全部買へないま外有川爲四郎)

▼延壽さんの聲を永い間聞きませんがもう聞けそうなのですれツバメさん又明鳥と云つた傑作を出して下さい(名古屋延壽黨)

ラヂオくとかましく騒いで居りますが、こんなレコードを聞くととてもラヂオは足下へもよつつけません、ごうか清元家元のレコードも一日も早くお出し下さい(大阪堺筋町人生)

▼僕は映畫をより好きに思つてゐるもので又映畫伴奏を聞いて知らずのうちに、低級ですが音楽に興味を持ちました今度の日東管絃團のインテアンワイロンが最も好きな曲の一つでした又あんな映畫伴奏的なレコードをお願ひします(横濱映畫ファン)

▼俺は綾太郎の浪花節が大好きだ曾我兄弟は連も良い矢張り毒婦もよりこんな方が希望だ(大阪市東區五町浪曲好生)

▼グアイオリン獨奏のよいレコードが生まれぬ又田中平三郎さんのセレーナードの様ないいものを聞きたいものです(TK生)

大正十四年十二月廿五日印刷  
大正十五年一月一日發行

(定價一部金拾錢郵稅共)  
▽半年分前納郵稅共金五拾錢  
▽壹ヶ年分前納郵稅共金九拾錢  
▽雜誌は總て前金御註文の事  
▽郵券代用は一割増

發行所 日東タイムス社  
大阪市住吉區住吉神社南門前  
發行所 日東タイムス社  
電話 戎長一〇五〇番  
戎長一〇二一番  
住吉 三七一番



1235 黒	佐藤秀郎	(文部省推薦) ナト・レ・ノ・ス・ド・ローラン	1621 黒特	ラファエルカリーチエ	1210 赤	(文部省推薦) キリエンマルダンス	625 黒	大津賀八郎	リゴレット抜萃、女心
1244 黒	齋藤の舟唄	(文部省推薦) ホフマンの舟唄	1622 黒	BOBOLFO (カナル) CAVOTTE (カナル)	1420 赤	鷺鷥三番	626 黒	沈鐘抜萃、ハイソリティの唄	水野康幸
1321 黒	序曲、ボックスマク	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	1461 黒特	(文部省推薦) RONDÓ (ロンド) DANZA DEL NANI (ダンスナニ)	1556 黒	Guage of Armour Avenue. By the Water of Minnetonka. (イアンダーソン、ワグネル)	1313 黒	(文部省推薦) 城島少の女	花女
1452 黒	トロンボーン	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	1462 黒特	(文部省推薦) TAVANNA (タヴァナ) PAVANA (パヴァナ)	1829 赤	イアンダーソン、ワグネル	627 赤	少唱歌集	元第四師團軍樂隊
1499 黒	(文部省推薦) リニエールの舟唄	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	1463 黒特	(文部省推薦) Lento solo. (第九前奏曲) IX. PRELUDO.	1754 紫	雪の進軍(軍歌入)	516 赤	歌劇トロバトーレ	下上
1598 黒	カナルニズメ	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	1620 黒	1. CONCERTO. 第10. CONCERTO. 第10. 同伴奏第三樂章	1755 紫	お慰	517 赤	ネバニシラー	下上
1672 黒	カナルニズメ	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	オーケストラ		1148 黒	純粋支那樂 時新行街加快	519 赤	軍軍用歌	下上
1876 黒	セルナターテ(ドワリ)	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏			1180 黒	山田耕作指揮 日本交響管絃團	522 赤	勸進帳	下上
1322 赤	當選者の喜び	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	1063 赤	ワンステップチンチン	390 黒	モリス	824 赤	(文部省推薦) 歌劇抜萃、グモレット	歩兵第三十七聯隊
1772 紫	パンクエットゴラス	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	1004 黒	ワンステップチンチン	1294 黒	お江戸日本橋	534 赤	行進軍歌	金橋中佐
843 赤	柴笛、シエール、ハイアワー	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	1005 黒	林の中の鍛冶屋	1334 黒	太湖船	605 赤	軍隊喇叭	日課號音
1853 紫	浅川福太郎	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	1006 黒	アールの女	1430 赤	直川鐵也指揮 管絃團	1885 紫	陸軍分列行進、証足行進式	歩兵第八聯隊喇叭手
1854 紫	コルネット	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	1347 赤	松竹管絃團	1623 黒	マイカートンガール	音楽及喇叭		
851 黒	アレキサンデル、ドプロホートフ	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	1366 赤	松竹管絃團	1146 黒	大津市音楽隊			
1149 黒	マンダリン及リュート	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	937 黒	支那樂拔萃(ホープソング)	1147 黒	美都の美	628 黒	水野康幸	沈鐘抜萃、ハイソリティの唄
	江川幸一	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	1195 黒	安南王の行	1254 黒	サリアムテル	7 黒	早馬	秋
	バブラライカ	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	1153 赤	深安	4 赤	ワシントンポスト	8 黒	今	秋
	アレキサンデル、ドプロホートフ	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	1032 赤	枯す旅	1158 赤	流浪の森			
	マンダリン及リュート	(文部省推薦) エンボンニオン獨奏	1302 赤	観戦捷旗の					



1756 紫	足柄山、子取	1735 赤	文福茶	1733 赤	文福茶	1741 赤	青い鳥	1815 紫	蛙のお國	1628 赤	あさりのな	1744 赤	地震	846 黒	小人の號外	708 黒	お砂場遊び	285 黒	吐く	1713 黒	親	267 黒	あや
1756 紫	足柄山、子取	1735 赤	文福茶	1733 赤	文福茶	1741 赤	青い鳥	1815 紫	蛙のお國	1628 赤	あさりのな	1744 赤	地震	846 黒	小人の號外	708 黒	お砂場遊び	285 黒	吐く	1713 黒	親	267 黒	あや

831 赤	小園自野外生活	1270 黒	赤とくぼ	1385 黒	靴下の雨	1734 黒	親	428 赤	喜劇	429 赤	歌	431 赤	歌	437 赤	歌	431 赤	歌	921 黒	神龍	922 黒	喜劇	932 黒	喜劇	1001 黒	歌	1067 黒	アミ	1121 黒	お伽歌	1143 黒	歌	1209 黒	お伽歌	1350 黒	お伽歌
831 赤	小園自野外生活	1270 黒	赤とくぼ	1385 黒	靴下の雨	1734 黒	親	428 赤	喜劇	429 赤	歌	431 赤	歌	437 赤	歌	431 赤	歌	921 黒	神龍	922 黒	喜劇	932 黒	喜劇	1001 黒	歌	1067 黒	アミ	1121 黒	お伽歌	1143 黒	歌	1209 黒	お伽歌	1350 黒	お伽歌

1194 赤	ボート	829 赤	対話	1632 赤	迷	637 赤	雀	814 赤	芝居	817 赤	童話	830 赤	童話	859 赤	おとぎ	944 黒	童話	1161 黒	童話	982 黒	児童	1027 黒	児童	1067 黒	児童	1108 黒	児童	1164 赤	動物	1272 赤	地獄	1375 赤	癡
1194 赤	ボート	829 赤	対話	1632 赤	迷	637 赤	雀	814 赤	芝居	817 赤	童話	830 赤	童話	859 赤	おとぎ	944 黒	童話	1161 黒	童話	982 黒	児童	1027 黒	児童	1067 黒	児童	1108 黒	児童	1164 赤	動物	1272 赤	地獄	1375 赤	癡

1882 赤	日にやけ	455 黒	文部省推薦	445 黒	文部省推薦	776 赤	春	828 赤	お伽歌	879 赤	お伽歌	447 赤	お伽歌	816 赤	忍術	971 黒	藤六	1077 黒	道	1071 黒	道	1307 黒	お伽歌	1774 紫	五	1354 赤	赤ん坊	1416 赤	新年	1683 赤	お伽歌	1878 赤	お伽歌	1889 赤	お伽歌
1882 赤	日にやけ	455 黒	文部省推薦	445 黒	文部省推薦	776 赤	春	828 赤	お伽歌	879 赤	お伽歌	447 赤	お伽歌	816 赤	忍術	971 黒	藤六	1077 黒	道	1071 黒	道	1307 黒	お伽歌	1774 紫	五	1354 赤	赤ん坊	1416 赤	新年	1683 赤	お伽歌	1878 赤	お伽歌	1889 赤	お伽歌

歌劇及説明







1423	1422	1421	1420	1419	1418	1417	1416	1415	1414	1413	1412	1411	1410	1409	1408	1407	1406	1405	1404	1403	1402	1401	1400	1399	1398	1397	1396	1395	1394	1393	1392	1391	1390	1389	1388	1387	1386	1385	1384	1383	1382	1381	1380	1379	1378	1377	1376	1375	1374	1373	1372	1371	1370	1369	1368	1367	1366	1365	1364	1363	1362	1361	1360	1359	1358	1357	1356	1355	1354	1353	1352	1351	1350	1349	1348	1347	1346	1345	1344	1343	1342	1341	1340	1339	1338	1337	1336	1335	1334	1333	1332	1331	1330	1329	1328	1327	1326	1325	1324	1323	1322	1321	1320	1319	1318	1317	1316	1315	1314	1313	1312	1311	1310	1309	1308	1307	1306	1305	1304	1303	1302	1301	1300	1299	1298	1297	1296	1295	1294	1293	1292	1291	1290	1289	1288	1287	1286	1285	1284	1283	1282	1281	1280	1279	1278	1277	1276	1275	1274	1273	1272	1271	1270	1269	1268	1267	1266	1265	1264	1263	1262	1261	1260	1259	1258	1257	1256	1255	1254	1253	1252	1251	1250	1249	1248	1247	1246	1245	1244	1243	1242	1241	1240	1239	1238	1237	1236	1235	1234	1233	1232	1231	1230	1229	1228	1227	1226	1225	1224	1223	1222	1221	1220	1219	1218	1217	1216	1215	1214	1213	1212	1211	1210	1209	1208	1207	1206	1205	1204	1203	1202	1201	1200	1199	1198	1197	1196	1195	1194	1193	1192	1191	1190	1189	1188	1187	1186	1185	1184	1183	1182	1181	1180	1179	1178	1177	1176	1175	1174	1173	1172	1171	1170	1169	1168	1167	1166	1165	1164	1163	1162	1161	1160	1159	1158	1157	1156	1155	1154	1153	1152	1151	1150	1149	1148	1147	1146	1145	1144	1143	1142	1141	1140	1139	1138	1137	1136	1135	1134	1133	1132	1131	1130	1129	1128	1127	1126	1125	1124	1123	1122	1121	1120	1119	1118	1117	1116	1115	1114	1113	1112	1111	1110	1109	1108	1107	1106	1105	1104	1103	1102	1101	1100	1099	1098	1097	1096	1095	1094	1093	1092	1091	1090	1089	1088	1087	1086	1085	1084	1083	1082	1081	1080	1079	1078	1077	1076	1075	1074	1073	1072	1071	1070	1069	1068	1067	1066	1065	1064	1063	1062	1061	1060	1059	1058	1057	1056	1055	1054	1053	1052	1051	1050	1049	1048	1047	1046	1045	1044	1043	1042	1041	1040	1039	1038	1037	1036	1035	1034	1033	1032	1031	1030	1029	1028	1027	1026	1025	1024	1023	1022	1021	1020	1019	1018	1017	1016	1015	1014	1013	1012	1011	1010	1009	1008	1007	1006	1005	1004	1003	1002	1001	1000	999	998	997	996	995	994	993	992	991	990	989	988	987	986	985	984	983	982	981	980	979	978	977	976	975	974	973	972	971	970	969	968	967	966	965	964	963	962	961	960	959	958	957	956	955	954	953	952	951	950	949	948	947	946	945	944	943	942	941	940	939	938	937	936	935	934	933	932	931	930	929	928	927	926	925	924	923	922	921	920	919	918	917	916	915	914	913	912	911	910	909	908	907	906	905	904	903	902	901	900	899	898	897	896	895	894	893	892	891	890	889	888	887	886	885	884	883	882	881	880	879	878	877	876	875	874	873	872	871	870	869	868	867	866	865	864	863	862	861	860	859	858	857	856	855	854	853	852	851	850	849	848	847	846	845	844	843	842	841	840	839	838	837	836	835	834	833	832	831	830	829	828	827	826	825	824	823	822	821	820	819	818	817	816	815	814	813	812	811	810	809	808	807	806	805	804	803	802	801	800	799	798	797	796	795	794	793	792	791	790	789	788	787	786	785	784	783	782	781	780	779	778	777	776	775	774	773	772	771	770	769	768	767	766	765	764	763	762	761	760	759	758	757	756	755	754	753	752	751	750	749	748	747	746	745	744	743	742	741	740	739	738	737	736	735	734	733	732	731	730	729	728	727	726	725	724	723	722	721	720	719	718	717	716	715	714	713	712	711	710	709	708	707	706	705	704	703	702	701	700	699	698	697	696	695	694	693	692	691	690	689	688	687	686	685	684	683	682	681	680	679	678	677	676	675	674	673	672	671	670	669	668	667	666	665	664	663	662	661	660	659	658	657	656	655	654	653	652	651	650	649	648	647	646	645	644	643	642	641	640	639	638	637	636	635	634	633	632	631	630	629	628	627	626	625	624	623	622	621	620	619	618	617	616	615	614	613	612	611	610	609	608	607	606	605	604	603	602	601	600	599	598	597	596	595	594	593	592	591	590	589	588	587	586	585	584	583	582	581	580	579	578	577	576	575	574	573	572	571	570	569	568	567	566	565	564	563	562	561	560	559	558	557	556	555	554	553	552	551	550	549	548	547	546	545	544	543	542	541	540	539	538	537	536	535	534	533	532	531	530	529	528	527	526	525	524	523	522	521	520	519	518	517	516	515	514	513	512	511	510	509	508	507	506	505	504	503	502	501	500	499	498	497	496	495	494	493	492	491	490	489	488	487	486	485	484	483	482	481	480	479	478	477	476	475	474	473	472	471	470	469	468	467	466	465	464	463	462	461	460	459	458	457	456	455	454	453	452	451	450	449	448	447	446	445	444	443	442	441	440	439	438	437	436	435	434	433	432	431	430	429	428	427	426	425	424	423	422	421	420	419	418	417	416	415	414	413	412	411	410	409	408	407	406	405	404	403	402	401	400	399	398	397	396	395	394	393	392	391	390	389	388	387	386	385	384	383	382	381	380	379	378	377	376	375	374	373	372	371	370	369	368	367	366	365	364	363	362	361	360	359	358	357	356	355	354	353	352	351	350	349	348	347	346	345	344	343	342	341	340	339	338	337	336	335	334	333	332	331	330	329	328	327	326	325	324	323	322	321	320	319	318	317	316	315	314	313	312	311	310	309	308	307	306	305	304	303	302	301	300	299	298	297	296	295	294	293	292	291	290	289	288	287	286	285	284	283	282	281	280	279	278	277	276	275	274	273	272	271	270	269	268	267	266	265	264	263	262	261	260	259	258	257	256	255	254	253	252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236	235	234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----



421	松平長七郎	日本橋	423	片岡我童	大一座	881	形半平	382	真葛ヶ原の春雨	456	赤	457	赤	會我通家五郎	大一座	1583	大正十四年度	花	踊
422	黒	の場	424	黒	三本木	882	木	883	夕	458	赤	459	赤	會我通家五郎	大一座	1584	大正十四年度	花	踊
425	黒	の場	426	黒	三本木	884	木	885	夕	460	黒	461	黒	會我通家五郎	大一座	1585	大正十四年度	花	踊
427	赤	橋	428	赤	橋	886	赤	887	赤	462	黒	463	黒	會我通家五郎	大一座	1586	大正十四年度	花	踊
429	赤	橋	430	赤	橋	888	赤	889	赤	464	黒	465	黒	會我通家五郎	大一座	1587	大正十四年度	花	踊
431	黒	の場	432	黒	の場	890	黒	891	黒	466	黒	467	黒	會我通家五郎	大一座	1588	大正十四年度	花	踊
433	黒	の場	434	黒	の場	892	黒	893	黒	468	黒	469	黒	會我通家五郎	大一座	1589	大正十四年度	花	踊
435	黒	の場	436	黒	の場	894	黒	895	黒	470	赤	471	赤	會我通家五郎	大一座	1590	大正十四年度	花	踊
437	赤	の場	438	赤	の場	896	赤	897	赤	472	赤	473	赤	會我通家五郎	大一座	1591	大正十四年度	花	踊
439	赤	の場	440	赤	の場	898	赤	899	赤	474	赤	475	赤	會我通家五郎	大一座	1592	大正十四年度	花	踊
441	赤	の場	442	赤	の場	899	赤	900	赤	476	赤	477	赤	會我通家五郎	大一座	1593	大正十四年度	花	踊
443	赤	の場	444	赤	の場	901	赤	902	赤	478	赤	479	赤	會我通家五郎	大一座	1594	大正十四年度	花	踊
445	赤	の場	446	赤	の場	903	赤	904	赤	480	赤	481	赤	會我通家五郎	大一座	1595	大正十四年度	花	踊
447	赤	の場	448	赤	の場	905	赤	906	赤	482	赤	483	赤	會我通家五郎	大一座	1596	大正十四年度	花	踊
449	赤	の場	450	赤	の場	907	赤	908	赤	484	赤	485	赤	會我通家五郎	大一座	1597	大正十四年度	花	踊
451	赤	の場	452	赤	の場	909	赤	910	赤	486	赤	487	赤	會我通家五郎	大一座	1598	大正十四年度	花	踊
453	赤	の場	454	赤	の場	911	赤	912	赤	488	赤	489	赤	會我通家五郎	大一座	1599	大正十四年度	花	踊
455	赤	の場	456	赤	の場	913	赤	914	赤	490	赤	491	赤	會我通家五郎	大一座	1600	大正十四年度	花	踊
457	赤	の場	458	赤	の場	915	赤	916	赤	492	赤	493	赤	會我通家五郎	大一座	1601	大正十四年度	花	踊
459	赤	の場	460	赤	の場	917	赤	918	赤	494	赤	495	赤	會我通家五郎	大一座	1602	大正十四年度	花	踊
461	赤	の場	462	赤	の場	919	赤	920	赤	496	赤	497	赤	會我通家五郎	大一座	1603	大正十四年度	花	踊
463	赤	の場	464	赤	の場	921	赤	922	赤	498	赤	499	赤	會我通家五郎	大一座	1604	大正十四年度	花	踊
465	赤	の場	466	赤	の場	923	赤	924	赤	500	赤	501	赤	會我通家五郎	大一座	1605	大正十四年度	花	踊
467	赤	の場	468	赤	の場	925	赤	926	赤	502	赤	503	赤	會我通家五郎	大一座	1606	大正十四年度	花	踊
469	赤	の場	470	赤	の場	927	赤	928	赤	504	赤	505	赤	會我通家五郎	大一座	1607	大正十四年度	花	踊
471	赤	の場	472	赤	の場	929	赤	930	赤	506	赤	507	赤	會我通家五郎	大一座	1608	大正十四年度	花	踊
473	赤	の場	474	赤	の場	931	赤	932	赤	508	赤	509	赤	會我通家五郎	大一座	1609	大正十四年度	花	踊
475	赤	の場	476	赤	の場	933	赤	934	赤	510	赤	511	赤	會我通家五郎	大一座	1610	大正十四年度	花	踊
477	赤	の場	478	赤	の場	935	赤	936	赤	512	赤	513	赤	會我通家五郎	大一座	1611	大正十四年度	花	踊
479	赤	の場	480	赤	の場	937	赤	938	赤	514	赤	515	赤	會我通家五郎	大一座	1612	大正十四年度	花	踊
481	赤	の場	482	赤	の場	939	赤	940	赤	516	赤	517	赤	會我通家五郎	大一座	1613	大正十四年度	花	踊
483	赤	の場	484	赤	の場	941	赤	942	赤	518	赤	519	赤	會我通家五郎	大一座	1614	大正十四年度	花	踊
485	赤	の場	486	赤	の場	943	赤	944	赤	520	赤	521	赤	會我通家五郎	大一座	1615	大正十四年度	花	踊
487	赤	の場	488	赤	の場	945	赤	946	赤	522	赤	523	赤	會我通家五郎	大一座	1616	大正十四年度	花	踊
489	赤	の場	490	赤	の場	947	赤	948	赤	524	赤	525	赤	會我通家五郎	大一座	1617	大正十四年度	花	踊
491	赤	の場	492	赤	の場	949	赤	950	赤	526	赤	527	赤	會我通家五郎	大一座	1618	大正十四年度	花	踊
493	赤	の場	494	赤	の場	951	赤	952	赤	528	赤	529	赤	會我通家五郎	大一座	1619	大正十四年度	花	踊
495	赤	の場	496	赤	の場	953	赤	954	赤	530	赤	531	赤	會我通家五郎	大一座	1620	大正十四年度	花	踊
497	赤	の場	498	赤	の場	955	赤	956	赤	532	赤	533	赤	會我通家五郎	大一座	1621	大正十四年度	花	踊
499	赤	の場	500	赤	の場	957	赤	958	赤	534	赤	535	赤	會我通家五郎	大一座	1622	大正十四年度	花	踊
501	赤	の場	502	赤	の場	959	赤	960	赤	536	赤	537	赤	會我通家五郎	大一座	1623	大正十四年度	花	踊
503	赤	の場	504	赤	の場	961	赤	962	赤	538	赤	539	赤	會我通家五郎	大一座	1624	大正十四年度	花	踊
505	赤	の場	506	赤	の場	963	赤	964	赤	540	赤	541	赤	會我通家五郎	大一座	1625	大正十四年度	花	踊
507	赤	の場	508	赤	の場	965	赤	966	赤	542	赤	543	赤	會我通家五郎	大一座	1626	大正十四年度	花	踊
509	赤	の場	510	赤	の場	967	赤	968	赤	544	赤	545	赤	會我通家五郎	大一座	1627	大正十四年度	花	踊
511	赤	の場	512	赤	の場	969	赤	970	赤	546	赤	547	赤	會我通家五郎	大一座	1628	大正十四年度	花	踊
513	赤	の場	514	赤	の場	971	赤	972	赤	548	赤	549	赤	會我通家五郎	大一座	1629	大正十四年度	花	踊
515	赤	の場	516	赤	の場	973	赤	974	赤	550	赤	551	赤	會我通家五郎	大一座	1630	大正十四年度	花	踊
517	赤	の場	518	赤	の場	975	赤	976	赤	552	赤	553	赤	會我通家五郎	大一座	1631	大正十四年度	花	踊
519	赤	の場	520	赤	の場	977	赤	978	赤	554	赤	555	赤	會我通家五郎	大一座	1632	大正十四年度	花	踊
521	赤	の場	522	赤	の場	979	赤	980	赤	556	赤	557	赤	會我通家五郎	大一座	1633	大正十四年度	花	踊
523	赤	の場	524	赤	の場	981	赤	982	赤	558	赤	559	赤	會我通家五郎	大一座	1634	大正十四年度	花	踊
525	赤	の場	526	赤	の場	983	赤	984	赤	560	赤	561	赤	會我通家五郎	大一座	1635	大正十四年度	花	踊
527	赤	の場	528	赤	の場	985	赤	986	赤	562	赤	563	赤	會我通家五郎	大一座	1636	大正十四年度	花	踊
529	赤	の場	530	赤	の場	987	赤	988	赤	564	赤	565	赤	會我通家五郎	大一座	1637	大正十四年度	花	踊
531	赤	の場	532	赤	の場	989	赤	990	赤	566	赤	567	赤	會我通家五郎	大一座	1638	大正十四年度	花	踊
533	赤	の場	534	赤	の場	991	赤	992	赤	568	赤	569	赤	會我通家五郎	大一座	1639	大正十四年度	花	踊
535	赤	の場	536	赤	の場	993	赤	994	赤	570	赤	571	赤	會我通家五郎	大一座	1640	大正十四年度	花	踊
537	赤	の場	538	赤	の場	995	赤	996	赤	572	赤	573	赤	會我通家五郎	大一座	1641	大正十四年度	花	踊
539	赤	の場	540	赤	の場	997	赤	998	赤	574	赤	575	赤	會我通家五郎	大一座	1642	大正十四年度	花	踊
541	赤	の場	542	赤	の場	999	赤	1000	赤	576	赤	577	赤	會我通家五郎	大一座	1643	大正十四年度	花	踊
543	赤	の場	544	赤	の場	1001	赤	1002	赤	578	赤	579	赤	會我通家五郎	大一座	1644	大正十四年度	花	踊
545	赤	の場	546	赤	の場	1003	赤	1004	赤	580	赤	581	赤	會我通家五郎	大一座	1645	大正十四年度	花	踊
547	赤	の場	548	赤	の場	1005	赤	1006	赤	582	赤	583	赤	會我通家五郎	大一座	1646	大正十四年度	花	踊
549	赤	の場	550	赤	の場	1007	赤	1008	赤	584	赤	585	赤	會我通家五郎	大一座	1647	大正十四年度	花	踊
551	赤	の場	552	赤	の場	1009	赤	1010	赤	586	赤	587	赤	會我通家五郎	大一座	1648	大正十四年度	花	踊
553	赤	の場	554	赤	の場	1011	赤	1012	赤	588	赤	589	赤	會我通家五郎	大一座	1649	大正十四年度	花	踊
555	赤	の場	556	赤	の場	1013	赤	1014	赤	590	赤	591	赤	會我通家五郎	大一座	1650	大正十四年度	花	踊
557	赤	の場	558	赤	の場	1015	赤	1016	赤	592	赤	593	赤	會我通家五郎	大一座	1651	大正十四年度	花	踊
559	赤	の場	560	赤	の場	1017	赤	1018	赤	594	赤	595	赤	會我通家五郎	大一座	1652	大正十四年度	花	踊
561	赤	の場	562	赤	の場	1019	赤	1020	赤	596	赤	597	赤	會我通家五郎	大一座	1653	大正十四年度	花	踊



317 赤	316 赤	381 赤	180 赤	171 赤	170 赤	169 赤	774 赤	677 赤	352 赤	351 赤	302 赤	301 赤	300 赤	134 赤	359 赤	382 赤	53 赤	51 赤	603 赤	580 赤	513 赤	466 赤	465 赤	
ハ五	流	十	流	秋	深	御	我	梅	江	滑	木	二	新	都	柳	一	大	大	柳	文	柳	千	同	計
ト返	の	二	行	し	り	所	れ	の	戸	詩	お	上	入	入	シ	杯	文	大	の	文	文	夜	安	計
セシ	節	上	節	の	川	の	て	の	の	吟	前	新	タ	タ	ヨ	飲	津	大	達	句	句	吹	量	宣
1699 赤	1396 赤	1320 赤	1273 赤	1183 赤	1184 赤	1139 赤	1091 赤	1072 赤	946 赤	434 赤	271 赤	271 赤	270 赤	220 赤	219 赤	181 赤	182 赤	167 赤	296 赤	288 赤	1609 赤	396 赤	403 赤	318 赤
ウ戀	三	な	や	角	大	都	地	浪	三	計	詩	琉	嬢	名	海	伊	仙	二	推	滝	館	青	松	部
ヒ	下	い	つ	あ	あ	あ	唄	花	下	量	入	奴	よ	名	大	米	臺	磯	に	に	り	館	松	部
ス	り	の	ち	の	あ	あ	萬	行	り	宣	入	球	か	屋	津	山	名	量	来	り	柳	山	道	櫻
の	が	し	よ	五	や	の	歳	遊	二	傳	は	さ	多	甚	像	山	物	節	山	山	も	替	く	木
舟	小	木	基	本	四	れ	女	失	上	江	島	コ	基	寺	甚	音	オ	太	出	出	さ	ほ	木	木
唄	遣	節	句	節	季	逸	上	敗	り	節	原	節	句	節	節	節	頭	節	奏	節	節	節	節	節
923 赤	867 赤	634 赤	289 赤	348 赤	284 赤	55 赤	52 赤	1818 赤	1872 赤	1764 赤	349 赤	1764 赤	151 赤	287 赤	217 赤	218 赤	147 赤	147 赤	189 赤	1791 赤	1723 赤	1709 赤	1171 赤	
館	二	二	ト	大	大	浪	網	博	大	二	芝	二	富	富	芝	太	南	南	升	緑	山	館	館	追
山	上	上	ワ	雪	雪	浪	十	博	多	上	太	上	田	田	太	地	地	家	い	鈴	山	山	山	分
節	内	内	ト	津	津	浪	段	島	島	上	大	上	喜	喜	大	地	地	鈴	蘭	か	山	山	山	坂
柳	逸	夜	ト	津	津	浪	段	多	多	上	大	上	久	久	大	地	地	鈴	な	い	山	山	山	作
133 赤	1870 紫	1471 赤	1364 赤	1276 赤	1196 赤	1104 赤	1060 赤	29 赤	1025 赤	151 赤	217 赤	218 赤	151 赤	287 赤	217 赤	218 赤	147 赤	147 赤	189 赤	1791 赤	1723 赤	1709 赤	1171 赤	
新	春	ト	文	都	春	大	三	グ	ト	乳	甲	か	乳	瓜	甲	か	ト	ト	都	都	都	都	都	津
鳴	大	館	文	都	春	大	三	グ	ト	乳	甲	か	乳	瓜	甲	か	ト	ト	都	都	都	都	都	津
緑	雨	句	文	都	春	大	三	グ	ト	乳	甲	か	乳	瓜	甲	か	ト	ト	都	都	都	都	都	津
江	津	入	文	都	春	大	三	グ	ト	乳	甲	か	乳	瓜	甲	か	ト	ト	都	都	都	都	都	津
節	替	都	文	都	春	大	三	グ	ト	乳	甲	か	乳	瓜	甲	か	ト	ト	都	都	都	都	都	津

1238 赤	館桑名殿節	1213 赤	丹後名殿節	1140 赤	梅箱は咲いナ節	1069 赤	淀川のな川ら節	1068 赤	安來節入の緑江節	1025 赤	紀伊のぼの國節	964 赤	文屋く津づ節	936 赤	文屋く津づ節	5 赤	追分しよこし節	434 赤	文句入の博いな多替節	357 赤	吹き寄せ米山基節	315 赤	新内入二上り新内節	314 赤	新鴨緑江節新世力節	718 赤	浪花節入都々々節	1624 赤	浪花節入都々々節	393 赤	浪花節入元都々々節	877 赤	部大津々津節	714 赤	常盤津入都々々節	713 赤	本調子木ラッ遣メ節	1763 紫	二大上り津新内節	695 赤	御座上附り三驛下り節	712 赤	奴のくさぼれん節	吉原仲ノ喜代治小ふじ節
770 赤	大磯ノ鳥節	680 赤	枯れすエ節	679 赤	名古屋の甚句節	361 赤	獅子ほんかいな、難ぎ節	351 赤	奉祝道行の難ぎ節	338 赤	博多節百身は町石の節	290 赤	五箇月夕雨暮節	289 赤	文句入都々々節	288 赤	つげめ家燕女つはめ節	285 赤	成イシヨコシヨ金節	594 赤	左人と様しよか節	1792 赤	浪志二わ上りが新内節	1627 赤	博伊多豫分節	1199 赤	追柳内さ芝葉節	1664 赤	稻薄上り新内節	1589 赤	青二上り新内節	1483 赤	よさのさの節	1443 赤	間梅に違も節	1128 赤	春深引徳き花寄せ節	1388 赤	尺八入とちかぼりちや節	1361 赤	硯活引徳き花寄せ節	1277 赤	浅サくいと節	
578 赤	伊豫上節(お俊傳兵衛)	512 赤	館へツチナ節	166 赤	御座上附り三新下り節	144 赤	文句入都々々節	117 赤	都三下々々節	611 赤	博多節	604 赤	鴨上り緑江節	499 赤	大鴨上り緑江節	1567 赤	博東の多雲節	1422 赤	雪推の量山ほし節	1127 赤	館慶の量山ほし節	1397 赤	文句入つちよせ節	806 赤	有浮明世節	1183 赤	青上り新内節	1007 赤	因新知つえたい音節	903 赤	海人か星山名い節	890 赤	米桑山名江節	870 赤	鳴えの緑江節	820 赤	井のじさ津節	浪花節入都々々節						
187 赤	都座附り三下り二上り新内節	1733 赤	都々々上り木新内節	291 赤	夜の吉原深夜の巻節	527 赤	び鳴の緑江替節	273 赤	滑仙の臺安大津替節	968 赤	西春の雨替人節	633 赤	て臺の替人節	990 赤	尺八入館々山節	1822 赤	博多の多津節	1206 赤	都々々節	1711 赤	博文句入磯多節	1680 赤	博多の多津節	1073 赤	詩桃入米太替節	969 赤	夕木暮津替節	940 赤	髪さあほま節	876 赤	白ぶ拍ぼの枝節	819 赤	流しの節	775 赤	愚痴節	678 赤	黒髪節	635 赤	文句入都々々節	107 赤	浪花節入都々々節			

808	赤	鼻	ね	じ	下上	202	赤	涼	み	舟	下上	811	赤	ナ	シ	ヤ	醫	者	下上	1890	赤	初	天	神	下上							
981	赤	さ	と	り	坊	主	下上	238	赤	宿	が	ち	め	ハ	商	賣	根	問	ひ	下上	1824	赤	餅	搗	屋	下上						
1083	赤	鍋	草	履	下上	174	赤	同	下	の	卷	下上	12	赤	ハ	問	答	下上	1723	赤	袈	裝	茶	屋	下上							
809	赤	布	引	の	産	下上	173	赤	浮	か	れ	上	浦	島	下上	9	赤	惠	比	須	小	判	下上	1664	赤	こ	が	ね	大	黒	屋	下上
1082	赤	初	天	神	下上	137	赤	須	磨	名	所	下上	1799	赤	字	違	団	治	下上	1637	赤	居	酒	屋	下上							
709	赤	す	つ	こ	け	下上	105	赤	酒	の	か	す	下上	1698	赤	魚	砲	屋	下上	1563	赤	返	摩	炬	下上							
243	赤	三	十	石	下上	100	赤	舞	子	の	濱	下上	1497	赤	赤	兒	ほ	め	下上	1441	赤	饅	屋	下上								
244	赤	三	柳	家	小	さん	下上	104	赤	ラ	ン	ホ	ー	醫	者	下上	1685	赤	鐵	砲	屋	下上										
263	赤	ひ	や	か	し	下上	72	赤	天	狗	さ	の	宿	下上	1357	赤	浮	世	紙	床	下上	1383	赤	反	對	車	下上					
1761	紫	芝	居	屋	芝	居	下上	274	赤	ろ	く	ろ	首	下上	1274	赤	い	か	け	屋	下上	1311	赤	婿	入	下上						
1137	赤	座	頭	殺	し	下上	438	赤	紙	屑	屋	下上	593	赤	五	目	講	談	下上	1310	赤	婿	入	下上								
949	赤	電	話	の	散	財	下上	827	赤	野	崎	詣	り	下上	1189	赤	藝	妓	唄	入	下上	1222	赤	ハ	ッ	ッ	イ	盜	人	下上		
950	赤	電	話	の	散	財	下上	827	赤	野	崎	詣	り	下上	1189	赤	藝	妓	唄	入	下上	1222	赤	ハ	ッ	ッ	イ	盜	人	下上		
164	赤	親	子	酒	下上	533	赤	貸	家	の	家	札	下上	1135	赤	厄	拂	ひ	下上	1190	赤	試	し	斬	下上							
138	赤	廻	より	み	湯	猫	下上	275	赤	近	日	息	子	下上	1044	赤	花	色	木	綿	下上	1168	赤	猫	の	災	難	下上				
107	赤	日	和	遠	ひ	下上	356	赤	大	晦	日	下上	993	赤	肝	つ	ぶ	し	下上	1066	赤	壺	算	下上								
1763	紫	山	節	中	蠶	節	下上	310	赤	書	割	盜	人	下上	555	赤	鱗	の	魅	入	れ	下上	1023	赤	八	筆	の	片	棒	下上		
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤	親	子	茶	屋	下上	710	赤	馬	の	田	樂	下上				
1737	赤	む	ら	治	ま	梅	作	下上	651	赤	猪	買	ひ	下上	370	赤																



352 赤	寺のフナモノ	笑福亭枝鶴	371 赤	御殿萬歳	京都眼鏡一行	1314 赤	米山節浪花節入、安	青の家雁玉 初春亭 玉輔	
766 赤	窓の間 還	柳亭左樂	378 赤	名古屋萬歳	550 赤	江州音頭 石川五右衛門	1314 赤	越後後 獅子替	
1304 赤	結 婚の夢	583 赤	583 赤	豊年齋 梅坊主一行	654 赤	忠臣藏 殿中及傷	1687 赤	1687 赤	電車夫婦喧嘩
1667 赤	凱 旋	963 赤	963 赤	大神樂 川 吉ほ	1086 赤	江州音頭 千兩幟	1626 赤	1626 赤	数え唄(テレクサイ)
1668 赤	談州樓 燕	1838 紫	1838 紫	大神樂、ごもりの又平	1626 赤	江州音頭 武勇傳	1705 赤	1705 赤	即滑 稽 席 洋 間 行 談
632 赤	掛 取 酒 屋	419 赤	419 赤	港家小龜一座	1639 赤	江州音頭 俊	1731 赤	1731 赤	滑 稽 鴨 綠 江 節 店
639 赤	ヨイく芝居	420 赤	420 赤	滑稽 餅 搗	957 赤	朝正 顔傳 日 記 子 熱	1331 赤	1331 赤	新之助 助 連
1760 紫	故 桂 文 園 治	443 赤	443 赤	滑稽 音曲々 藝	958 赤	朝正 顔傳 日 記 子 熱	1732 赤	1732 赤	法 界 小 三 三 間 堂
1760 紫	四 百 フ ラ ヲ	917 赤	917 赤	小 龜 音 曲	959 赤	朝正 顔傳 日 記 子 熱	1752 紫	1752 紫	花 月 家 花 奴 山 崎 登 吉
13 赤	三曲萬歳	918 赤	918 赤	櫻川壽榮丸	960 赤	お 鶴 殺 心	1839 紫	1839 紫	合 合 東 小 雲 原
15 赤	忠臣藏 殿中及傷	871 赤	871 赤	砂川捨丸加藤瀧子	961 赤	お 萱 道 心	1851 紫	1851 紫	滑 稽 安 來 節
16 赤	阿呆陀羅經	907 赤	907 赤	萬 歳 滑 稽 浪 花 節	1258 赤	口 技 鳥 物 の 啼 鳴 聲	1132 赤	1132 赤	吉 田 若 燕
73 赤	笑福亭鶴藏 橋ノ一團	939 赤	939 赤	萬 歳 安 博 綠 江 節	1249 赤	江 州 音 頭 千 兩 幟	1733 赤	1733 赤	赤 垣 源 藏
216 赤	詩 吟 櫻 狩、太田道浦	1020 赤	1020 赤	萬 歳 數 え 唄	1250 赤	木 村 芝 鶴 木 村 歌 蝶	432 赤	432 赤	藍 甲 齋 虎 丸
353 赤	紙圍 長 刀 鈴 離 子	1062 赤	1062 赤	萬 歳 掛 合 安 津 來	1295 赤	大 阪 天 王 寺 浪 界 吞 洲	433 赤	433 赤	(文部省推薦)曾我夜討
354 赤	京都 長刀鉾町通中	1103 赤	1103 赤	萬 歳 滑 稽 淨 瑠 璃	1299 赤	滑 稽 壺 坂	448 赤	448 赤	同 十 番 新
280 赤	櫻川小春池島家鶴子	1205 赤	1205 赤	節約宣傳 富士山組連	1294 赤	滑 稽 壺 坂	450 赤	450 赤	鹿 子 絞 競 達 引
281 赤	ヤン節 主 水	1233 赤	1233 赤	節約宣傳 富士山組連	1498 赤	博 多 鶴 龜 定 助	499 赤	499 赤	(文部省推薦)の 曙
282 赤	江州音頭 葉子別れ	1407 赤	1407 赤	博 多 鶴 龜 定 助	394 赤	博 多 鶴 龜 定 助	395 赤	395 赤	津 田 清 美
350 赤	萬 歳 新、不 如 歸 節	1498 赤	1498 赤	博 多 鶴 龜 定 助	1123 赤	博 多 鶴 龜 定 助	1124 赤	1124 赤	乃 木 將 軍 劍



1170 赤	寛永三馬術	1390 赤	堀部安兵衛生立	997 赤	燕鈴	215 赤	片愛
1188 赤	櫻川五郎藏	1446 赤	淺野内匠頭	1898 赤	入海	818 赤	永岡紫山田中縁郎
1344 赤	(文部省推薦)(琴入)	1466 赤	不破數右衛門	36 赤	戀初	1399 赤	別花
1121 赤	國定忠次	1565 赤	(文部省推薦)子別れ	415 赤	英海	1883 紫	ワ月
1444 赤	(文部省推薦)(琴入)	1588 赤	村上喜劍(道中附)	985 赤	水瀧	1883 紫	ワ月
1473 赤	少年武士(入)	1783 赤	佐倉義民傳	1090 赤	或る夜の艶歌師	1883 紫	ワ月
1744 赤	菊燈籠	1784 赤	倉橋傳助	1120 赤	赤	1883 紫	ワ月
1743 赤	櫻川五郎藏	1677 赤	倉橋傳助	1154 赤	ハ復	1883 紫	ワ月
1739 赤	大石と村上	1710 赤	隠岐の孤島	1348 赤	落戀	1883 紫	ワ月
212 赤	柳生二蓋笠	1717 赤	浪花一右衛門	1635 赤	道田	1883 紫	ワ月
1921 赤	大岡裁判躑屋騷動	1718 赤	桃中軒如光	1888 紫	族す	1883 紫	ワ月
1461 赤	小僧	1762 紫	東家燕太夫	966 赤	水失	1883 紫	ワ月
1213 赤	橋傳助	1771 紫	乃木將軍	875 赤	赤馬	1883 紫	ワ月
121 赤	石童丸	1849 紫	寺井金春	947 赤	曾輕	1883 紫	ワ月
1368 赤	(文部省推薦)有馬騷動の内	1840 紫	乃木將軍	715 赤	新橋	1883 紫	ワ月
1813 赤	續孝子與吉	1919 紫	乃木將軍	633 赤	枯流	1883 紫	ワ月
1633 赤	秋田土産	1919 紫	乃木將軍	1773 紫	市川	1883 紫	ワ月
1631 赤	姐妃のお百	1227 赤	乃木將軍	139 赤	浮	1883 紫	ワ月
1704 赤	越の海男藏	1235 赤	乃木將軍	149 赤	新來	1883 紫	ワ月
1727 赤	天一坊	1414 赤	乃木將軍	165 赤	好	1883 紫	ワ月
1745 赤	會我兄弟討入	147 赤	乃木將軍	209 赤	ウ	1883 紫	ワ月
1890 赤	伊達騷動の内	1566 赤	乃木將軍	209 赤	ウ	1883 紫	ワ月
1881 赤	神並の返り忠	1728 赤	乃木將軍	209 赤	ウ	1883 紫	ワ月
1187 赤	赤鹽原多助	1728 赤	乃木將軍	209 赤	ウ	1883 紫	ワ月

吉田虎右衛門 東天紅

桃中軒如

流 奈 唄

宗 教

215 赤

永岡紫山田中縁郎

福井朱真

別花

藤波笑

ワ月

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

蕨

1793 赤		御 文 章		下上	
1794 赤		正 信 傷		下上	
1795 赤		御 和 讚		下三	
1796 赤		御 俗 姓		下三	
1797 赤					
本派本願寺奉仕局知堂 瀧川 寛了					
631 黒		羽		衣	
1236 黒		天葛		鼓城	
1714 赤		玉杜		葛若	
621 黒		船		辨 慶	
623 黒		葵		上、 砧	
46 黒		松		風	
1038 黒		勸		進 帳	
1433 赤		鉢		木	
1588 黒		隅		田 川	
1678 赤		三		井 寺	
788 黒		石		橋	
1865 赤		熊		野	
觀世流宗家 觀世元滋					
1400 特		高		砂	
1401 特		羽		衣	
1402 特		狸		々	
1500 特		景		清	
1501 特		景		清	
1502 特		鐵		輪	
1403 特		松		風	
1404 特		英		上	
1431 特		竹		生 鳥	
1432 特		竹		生 鳥	
1433 特		蟬		丸	
1434 特		蟬		丸	
男爵田中義一氏					
1299 黒		護		國 の 礎	
1290 黒		陸軍中將		權藤傳次氏	
1245 赤		排日問題		國難に面して	
1216 赤		子爵後藤新平氏		就て	
833 赤		少年團に		就て	
神田伯山					
993 黒		講談大正震災記		清水次郎長 (大瀬半五郎卷) (全八枚)	
996 黒		桂 小文治		桂 小文治	
999 赤		大震災難物語		花月亭九里丸	
778 赤		滑稽排節		桂家殘月	
1130 赤		御成婚紀念		東宮殿下の巻	
1131 赤		御成婚紀念		良子女王殿下の巻	
1508 赤		御成婚紀念		聖上陛下の巻	
1509 赤		御成婚紀念		母陛下の巻	
特黒レーベル		定價		金貳圓五拾錢	
黒レーベル		定價		金壹圓六拾錢	

# 謹賀新年

大正十五年一月元旦

評學レコード定價 金壹圓貳拾錢  
 兩面壹枚ニ付キ販賣  
**赤レーベル** 金壹圓四拾錢  
**紫レーベル** 金八拾錢

ニット一號蓄音機の型録は  
 各蓄音器店に御請求下さい

大阪市住吉區上住吉町住吉神社南門前

**日東蓄音器株式會社**

電話 戎長一〇二一番  
 戎長一〇五〇番  
 住吉三七一番

大阪市東區備後町二丁目一番地

**日東蓄音器大阪營業所**

電話本町一四八〇番

東京市京橋區銀座一丁目五番地

**日東蓄音器東京營業所**

電話銀座六〇五九番

福岡市中島町四六

**日東蓄音器九州營業所**

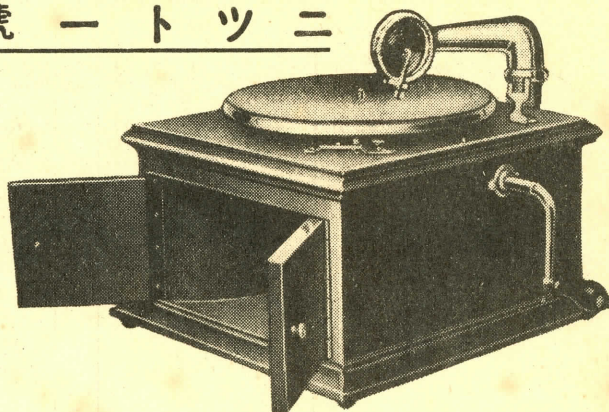
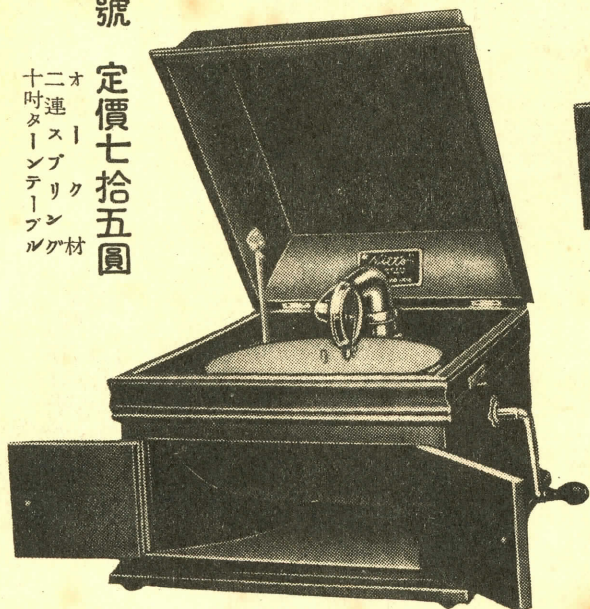
電話一一二八番

ニツト一號蓄音機

三號

定價七拾五圓

オ  
二連スプリング  
十時ターンテーブル  
材

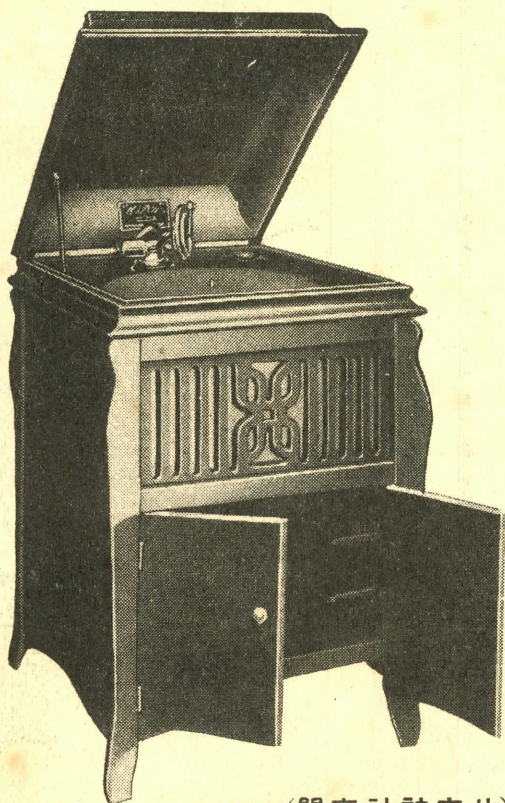


二號 定價五拾五圓

オ  
二連スプリング  
十時ターンテーブル  
材

五號 定價百參拾圓

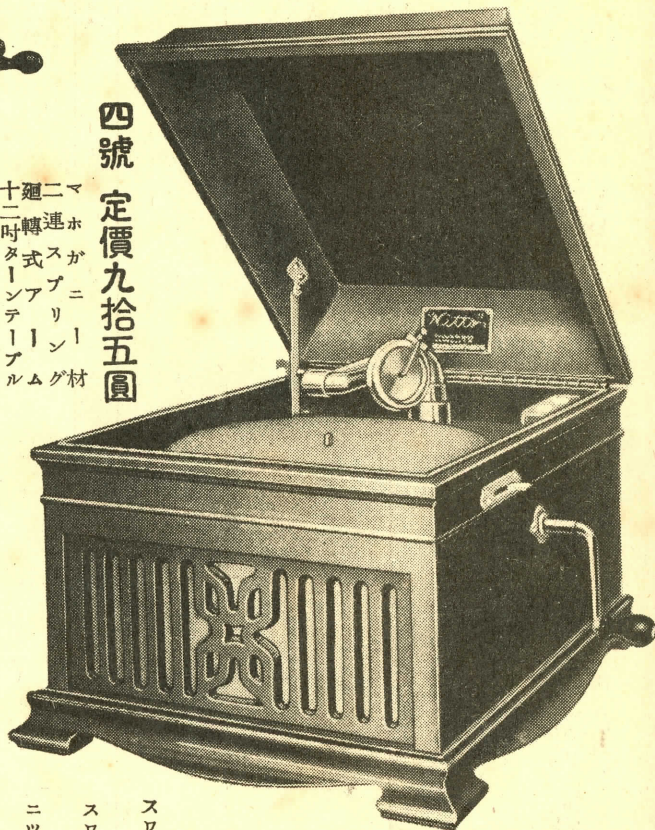
マホガニー材 二連スプリング  
廻轉式アーム 十二時ターンテーブル



四號

定價九拾五圓

マ  
二連スプリング  
十時ターンテーブル  
材



ス  
ワ  
ロー印純鋼針  
赤罐二百本入金五十錢  
ス  
ワ  
ロー印三角竹針  
一袋百本入金三十錢  
ニ  
ツ  
ト一袋十本入金五十錢



大阪市住吉區上住吉町(住吉神社南門)  
日東蓄音器株式會社

192  
黒  
鐵  
輪  
下  
黒  
レ  
ー  
ハ  
ル  
金  
庫  
圓  
六  
拾  
錢



家宗流世觀

込吹生先滋元世觀

ド一コレ謠番回五第

高

砂

全一番五枚續

定價金拾貳圓五拾錢

既發賣番謠

熊野	全一番	九枚續
田村	全一番	六枚續
俊寬	全一番	六枚續
弱法師	全一番	六枚續

觀世流謠曲音譜會發賣

本番謠レコードは全國各蓄音器店にて取次販賣す

山形縣 山形市 山形郵便局 山形支店 山形市 山形郵便局 山形支店 山形市 山形郵便局 山形支店